



文化財調査シンボルマーク

京都府京田辺市

# 堀切古墳群発掘調査報告書Ⅲ

—新堀切谷・里ノ内地内宅地造成工事に伴う発掘調査報告書Ⅱ—

2010

京田辺市教育委員会

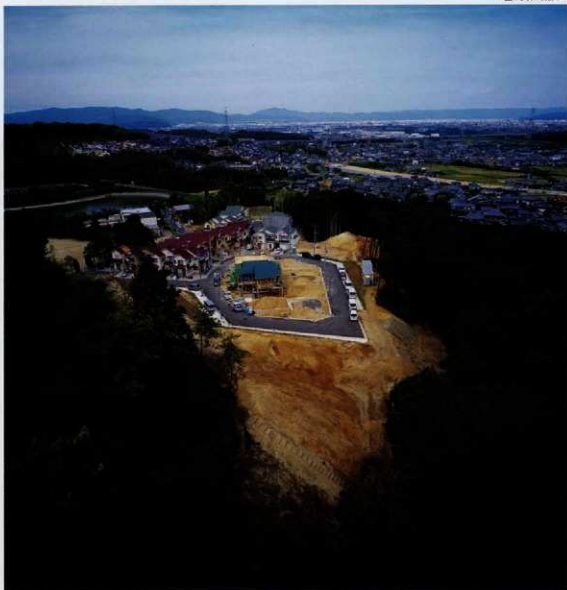
京都府京田辺市

# 堀切古墳群発掘調査報告書Ⅲ

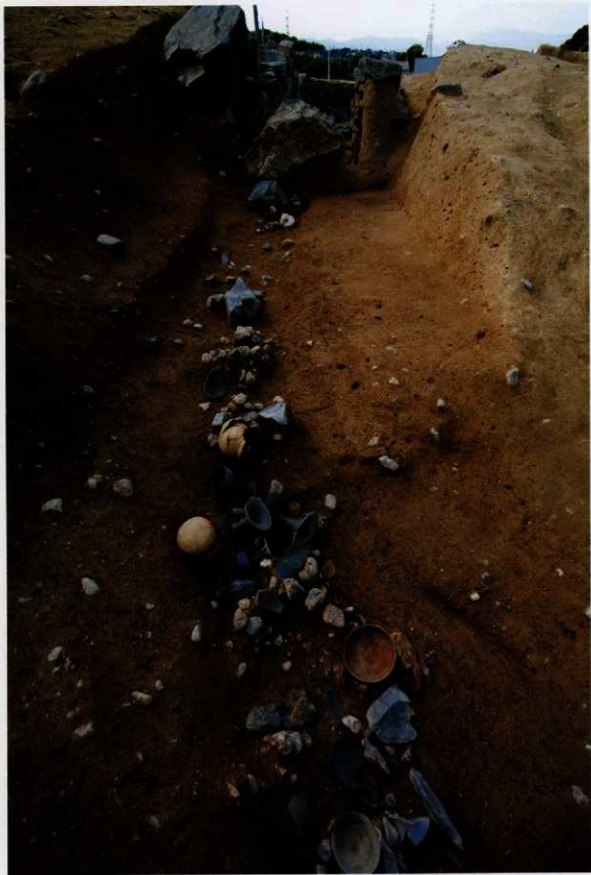
—薪堀切谷・里ノ内地内宅地造成工事に伴う発掘調査報告書Ⅱ—

2010

京田辺市教育委員会



堀切10・11号墳遠景（手前が11号墳：南から）



堀切11号墳羨門前排水溝遺物出土状況（南東から）



堀切11号墳出土土器



堀切11号墳出土土師質亀甲形陶棺片

## 序

京田辺市の中央部、とんちの一休さんで有名な一休禅師が建立した酬恩庵のある薪の丘陵地には、古墳時代後期の古墳群が数多く存在することが知られています。このたび報告する堀切古墳群もそのひとつで、丘陵の高所には横穴式石室墳が、同じ丘陵の斜面には横穴が造られるという市内でもまれな存在となっています。

今回の調査は、平成17年度に実施した第3次調査地に隣接した地域で行った、この古墳群では4回目の調査になり、主に17年度に一部が確認された11号墳と以前から知られている10号墳を対象にしたものです。ともに半分以上が失われている状況での調査でしたが、11号墳では、前回みつかった陶棺に加え、凝灰岩製の家形石棺が使われていたことがわかるなど、一定の成果を得ることができました。

最後になりましたが、今回の調査にあたりましては、3次調査同様事業関係の方々、関係機関をはじめ多くの方々のご協力・ご指導を賜りました。あらためてお礼申し上げますとともに、今後とも埋蔵文化財へのご理解を賜りますようお願い申し上げます。

平成22年3月

京田辺市教育委員会

教育長 村田 新之昇

## 例 言

- 1 本書は、京都府京田辺市新堀切谷・里ノ内地内宅地造成工事に伴う堀切古墳群発掘調査報告書Ⅲで、既刊の『京都府田辺町堀切古墳群調査報告書』田辺町教育委員会 1989、『堀切古墳群発掘調査報告書Ⅱ』京田辺市教育委員会 2006の続編である。
- 2 現地調査及び整理報告は、京田辺市教育委員会、株式会社信和住宅、安西工業株式会社三者で覚書を締結して実施した。
- 3 現地調査は、平成19年8月20日に開始し、同年11月2日に終了した。
- 4 調査組織は次の通りである。

調 査 主 体……京田辺市教育委員会  
調 査 指 導 機 関……京都府教育委員会・京田辺市文化財保護委員会  
調 査 担 当 者……京田辺市教育委員会教育部 社会教育課 鷹野 一太郎  
安西工業株式会社 調査部 調査技師 鈴木 啓史  
発 掘 調 査 作 業……安西工業株式会社
- 5 調査を実施するにあたり、土地所有者の株式会社信和住宅には多大なる御協力と御支援を賜った。記して感謝いたします。
- 6 調査期間中及び本書を作成するにあたり、次の方々からご教示を賜った。記して感謝の意を表します。(順不同・所属敬称略)

辰巳和弘、橋本清一、森岡秀人、富山直人、中村浩、菱田哲郎、堀内明博、竜子正彦、丸川義広、三辻利一、今尾文昭、千賀久、占部行弘、吉村和昭、梅本康広、平良泰久、奥村清一郎、深澤芳樹、林正憲、南部裕樹、渋谷誠、後藤完二、安孫子雅史、久富正登、入江剛弘
- 7 調査及び本書作成に関して、現場・遺物写真は豊田有三氏、金属製品の保存処理は奈良県立橿原考古学研究所の協力を得た。記して感謝の意を表します。
- 8 本書で使用した遺跡の名称及び古墳番号は、『京都府田辺町遺跡地図』(田辺町教育委員会 1995)に従った。
- 9 遺跡及び遺構の位置は、世界測地座標系により示した。標高は海拔(T.P)である。本書第2図で使用した地図は、国土地理院発行地形図(1:25,000)「田辺」・「枚方」・「宇治」・「奈良」を編集して使用した。
- 10 出土遺物及び図面・写真等一切の記録類は、京田辺市教育委員会が保管している。
- 11 本書の執筆は、Iはじめに、Ⅲ2.(1)を鷹野が、他を主に鈴木が分担して行い、Ⅳ2.(1)E羨道部の石材材質を京都府立山城郷土資料館橋本清一氏、Ⅳ2.(2)A須恵器・B土師器を大阪大谷大学文学部文化財学科大川健、飯田綾美両氏、V堀切古墳群出土土器の蛍光X線分析を同大学三辻利一氏、Ⅶ総括を京都府立大学堀内明博氏からそれぞれ報告を賜った。本書の編集は、鷹野の指導・助言のもと、鈴木啓史・島軒満が行った。

# 本文目次

I	はじめに	1
II	位置と環境	2
	1. 地理的環境	2
	2. 歴史的環境	4
III	調査経過	9
	1. 既往の調査と綴喜郡内の古墳研究の歩み	9
	2. 調査の経緯	11
	(1) 試掘調査	11
	(2) 本調査	11
IV	遺構・遺物	15
	1. 堀切10号墳	15
	2. 堀切11号墳	17
	(1) 埋葬施設の構造	17
	A 玄室部	18
	B 羨道部	18
	C 排水溝	24
	D 遺物の出土状況	27
	E 羨道部の石材材質	29
	(2) 出土遺物	30
	A 須恵器	30
	B 土師器	34
	C 陶棺	36
	D 凝灰岩	39
	E 金属製品	40
	F その他の遺物	41
	(3) 小結	41
	3. 横穴状遺構	46
V	堀切古墳群出土土器の蛍光X線分析	47
VI	まとめ	55
	1. 古墳の評価	55
	2. 堀切古墳群の史的意義	56
VII	総括	63



## 巻頭図版目次

- 巻頭図版1 堀切10・11号墳遠景(南から)  
巻頭図版2 堀切11号墳羨門前排水溝遺物出土状況(南東から)  
巻頭図版3 上:堀切11号墳出土土器  
下:堀切11号墳出土土師質亀甲形陶棺片

## 挿図目次

第1図	調査地位位置図	1
第2図	周辺遺跡図	2
第3図	稲葉遺跡方形周溝墓(北から)	5
第4図	大住南塚古墳・大住車塚古墳	6
第5図	筒城宮跡碑(同志社大学校内)	7
第6図	試掘調査風景(南から)	11
第7図	堀切1号墳石室(南東から)	11
第8図	11号墳夾測作業風景	12
第9図	堀切古墳群古墳・横穴分布図	12
第10図	調査区位置図	13
第11図	現地説明会風景	14
第12図	10号墳完掘後墳丘測量図・土層断面図	15
第13図	10号墳完掘後全景(北から)	16
第14図	10号墳完掘後全景(北東から)	16
第15図	11号墳調査前風景(北西から:平成17年度)	17
第16図	11号墳墳丘検出状況(西から)	17
第17図	11号墳全景(南西から:平成17年度)	18
第18図	11号墳玄室掘形(南東から:平成17年度)	18
第19図	11号墳墳丘測量図	19
第20図	11号墳石室実測図・土層断面図	20
第21図	11号墳調査区全景(鉛直方向)	21
第22図	11号墳羨道部(鉛直方向)	21
第23図	11号墳羨道部(北西から)	22
第24図	11号墳羨道部(北東から)	23
第25図	11号墳羨道部(北西から)	23

第26図	11号墳羨道部東側壁(南西から) .....	25
第27図	11号墳羨道部東側壁細部(南西から) .....	25
第28図	11号墳羨道部西側壁(北東から) .....	26
第29図	11号墳羨道部西側壁細部(北東から) .....	26
第30図	11号墳羨門前排水溝遺物出土状況図 .....	27
第31図	11号墳羨門前排水溝遺物出土状況①(南東から) .....	28
第32図	11号墳羨門前排水溝遺物出土状況②(北東から) .....	28
第33図	11号墳出土須恵器実測図 .....	31
第34図	11号墳出土須恵器・土師器実測図 .....	33
第35図	11号墳出土須恵器 .....	35
第36図	11号墳出土須恵器・土師器 .....	36
第37図	11号墳出土陶棺実測図 .....	37
第38図	11号墳出土陶棺 .....	37
第39図	11号墳出土凝灰岩片実測図 .....	39
第40図	11号墳出土凝灰岩片 .....	40
第41図	11号墳出土鉄製品実測図 .....	41
第42図	11号墳出土鉄製品 .....	41
第43図	京田辺窯群須恵器の両分布図 .....	51
第44図	陶邑群と京田辺群の相互識別表(K、Ca、Rb、Sr) .....	52
第45図	堀切古墳群出土須恵器の両分布図 .....	53
第46図	堀切古墳群出土須恵器の産地推定表(K、Ca、Rb、Sr) .....	54
第47図	堀切古墳群・横穴群主要出土遺物 .....	60
第48図	南山城における後期古墳分布図 .....	67

## 表 目 次

表1	11号墳出土須恵器編年表 .....	42
表2	11号墳出土遺物観察表(1) .....	43
表3	11号墳出土遺物観察表(2) .....	44
表4	11号墳出土遺物観察表(3) .....	45
表5	京田辺市窯跡出土須恵器の分析データ .....	50
表6	堀切古墳群出土須恵器・土師器・埴輪の分析データ .....	50
表7	堀切古墳群・横穴群の諸要素一覧 .....	61

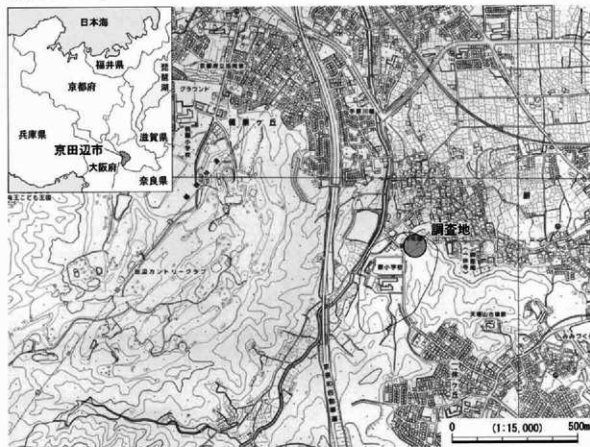
## I はじめに

堀切古墳群は、京都府京田辺市新堀切谷・里ノ内ほかに所在する古墳時代後期の円墳と横穴で構成される古墳群である。

株式会社信和住宅は、平成17年度に引き続きその隣接した区域で、大規模な切土を主体とする第2期宅地造成を計画し、平成19年4月京田辺市教育委員会に埋蔵文化財に関する問い合わせを行った。当委員会では、当該区域に堀切10・11号墳の2基の古墳があること、さらに未発見の古墳等が存在する可能性のあることから、現地の踏査、試掘確認の調査ののち、本格的な調査の必要な旨伝えた。

株式会社信和住宅では、発掘調査の現地作業等を安西工業株式会社に依頼し、当委員会指導のもと、平成19年5月に試掘調査を実施した。その結果を受け、当委員会では両社と三者による覚書を締結し、8月20日から現地調査を開始し、11月2日に終了した。なお、期間中の10月27日には一般市民を対象とした現地説明会を開催した。

なお、調査に際しては、土地所有者である株式会社信和住宅をはじめ、関係機関、地域の方々、また酷暑のなか調査に直接従事された作業員さん等、多くの方々の協力を得た。記して感謝の気持ちとしたい。



第1図 調査地位置図

## II 位置と環境

### 1. 地理的環境

**位置と交通** 堀切古墳群が所在する京都府京田辺市は、京都府の南西部、南山城地域の中央やや西寄りに位置する。同市は東を木津川、西を生駒山系、北を八幡市、南を精華町と接し、人口約6万3千人、総面積は約43km<sup>2</sup>の規模となっている。平成21年の統計によると、内訳は山林21.6%、田18.0%、宅地14.2%と、全体の約53.8%を占める。市内中央西寄りには南北に京奈和自動車道、府道八幡木津線や山手幹線が縦走り、ほぼ中央を東西に国道307号、南部に府道生駒井手線が横断し、北西端には平成15年から第2京阪道が開通している。鉄道はJR片町線（学研都市線）や近鉄京都線がほぼ中央を縦走り、京都市内へは約25分で約22km、大阪市内へは約45分で約28km、奈良市内へは約20分、約17kmの距離にある。このように同市は京都と奈良のほぼ中間に位置するといえ、大阪にも比較的近いといえよう。

歴史的にみても、同市には平安京遷都以前は大和と山陰を結ぶ古山陽・古山陰併用道が通っており、遷都後も奈良街道（歌姫越）が古山陰道を踏襲している。古山陽・古山陰併用道は京田辺市大住地区岡村付近で分かれ、古山陽道は北西へ丘陵の麓に沿いながら南西向きを変え河内国樟葉駅に至り、摂津大原・殖村両駅を経て西行していた。これが後の大阪街道にあたる。一方古山陰道は北北西に進み、淀川を渡り、乙訓郡駅家に至って、丹波国篠へ向かう。また田原道は、古山陽・古山陰併用道の山本駅（現在の京田辺市山本）付近より草内から木津川を渡り、青谷から青谷川の谷を廻り、大石を経て勢多駅から近江国府に至る現在の国道307号に相当する。このように綴喜郡は、南山城から山陽、山陰、東山の主要な国々などの地域を結ぶ交通路の分岐点でもあった。

今回調査した堀切古墳群は、京田辺市薪堀切谷・里ノ内地内に所在する。それは、JR片町線京田辺駅から西北西1.5kmに位置し、徒歩で20分ほどの一休寺西側丘陵の山林及び竹林内に所在する。

**古墳群の立地** 京田辺市の標高は、約15～310mにあり、比高差は295mとなる。地形と地質からおおよそ5ブロックに区分することができる。1. 西端部の硬い基盤岩（花崗岩）からなる生駒山脈北方の山地、2. 京田辺市の霊山古生層からなる甘南備山、3. これらの山地を除く男山丘陵から甘南備丘陵に続く東斜面の古期洪積層（大阪層群、大住礫層）、4. その東縁部に細長く分布する東畑（H）・尊延寺（S）砂泥互層、5. その東方に広がる木津川の沖積地となる平野、である。一方市内を東西に流れる河川として、北から井手川（手原川）、天津神川、普賢寺川などがあり、いずれも木津川に至る。井手川は甘南備山の南に源を發し、薪地区の主要河川で、全長約5.5kmに亘り、一年中水の絶えることがなかった。『吾妻鏡』嘉禎元年（1235）五月二三日条にみる薪・大住両荘の用水相論から發し、興福寺と石清水八幡宮の2大権門の確執にまで発展したことの原因となったのは、この河川であった。このうち天津神川



- |              |               |             |           |            |            |
|--------------|---------------|-------------|-----------|------------|------------|
| 1. 堀切古墳群・横穴群 | 2. 西新遺跡       | 3. 天理山古墳群   | 4. 小穴古墳群  | 5. 城ヶ前遺跡   | 6. 茂ヶ谷遺跡   |
| 7. 稲葉丹後谷古墳   | 8. 田辺城跡       | 9. 神奈備寺跡    | 10. 観音山古墳 | 11. 牛ノ宮古墳  | 12. 西山古墳群  |
| 13. 新遺跡      | 14. 畑山古墳群     | 15. 大穴古墳    | 16. 狼谷遺跡  | 17. 郷土塚古墳群 | 18. 藪城跡    |
| 19. 貴谷古墳群    | 20. 城山古墳群     | 21. 大住城跡    | 22. 内山古墳  | 23. 月読神社古墳 | 24. 上西野古墳  |
| 25. 立岡地蔵古墳   | 26. 大住南塚古墳    | 27. 大住車塚古墳  | 28. 姫塚古墳  | 29. 西村遺跡   | 30. 相合遺跡   |
| 31. 門田遺跡     | 32. 木津川東岸河床遺跡 |             | 33. 龜田遺跡  | 34. 新田遺跡   | 35. 天神社古墳群 |
| 36. 松井横穴群    | 37. 荒庚横穴群     | 38. 女谷横穴群   | 39. 狐谷横穴群 | 40. 王塚古墳   | 41. 美濃山横穴群 |
| 42. 美濃山廃寺跡   | 43. 口仲谷古墳群    | 44. 交野ヶ原廃跡群 | 45. 松井窟跡群 | 46. 虚空蔵谷遺跡 |            |

第2図 周辺遺跡図

は、普段涸川でほとんど水量のない川である。一方普賢寺川は京田辺市の西南端峰山に源を発し、木津川に注ぐ市内最長の河川で、全長約10kmにわたる。井手川同様一年中水の絶えることはないが、水量はそれほど豊富ではなかった。

堀切古墳群をはじめとする古墳時代後期の古墳群ないし横穴は、甘南備山系東斜面の古期洪積層、すなわち大阪層群大住礫層上の、標高50～80mほどの範囲に分布する。これは、八幡市男山丘陵から大住、薪、田辺、普賢寺、煤谷川上流を経て生駒丘陵東斜面に至る南北に細長く帯状に延びた範囲を占める。そしてその丘陵縁辺と沖積地の境界付近に弥生時代から現代に至る集落が点在し、現在まで居住域として存続してきた。このうち堀切古墳群は、田辺丘陵におけるウマノセ山塊群の北端、即ち馬の背のように屹立し、起伏の激しい堀切谷のような入り組んだ谷地形を含む地形上に立地する。八幡市から京田辺市に点在する古墳時代後期の群集墳は、このような地形上に集中する傾向がうかがえる。

## 2. 歴史的環境

京田辺市は、旧山城国、旧部の綴喜郡に属する。そこは東を近江国、西を河内国、南を大和国及び相楽郡と接し、北は久世郡、そして淀川を挟んで乙訓郡と、東北の一部は宇治川を挟んで宇治郡とも相対する。

旧石器時代の資料としては、市南部山間地域天王高ヶ峯に所在する高ヶ峯遺跡から後期に属するサヌカイト製石核1点が出土するに過ぎない。

京田辺市薪地区一帯の最古の集落遺跡として、近年調査で明らかになった縄文時代中期末(北白川C式1・2期)の薪遺跡があり、隅丸方形の竪穴住居や土壇群などが発見されている。それに伴い近畿地方でも最大級の石棒が石皿などの石器とともに発見された。今日まで、京都府南部においてこの時期を代表する遺跡としては、東山山系西側扇状地に立地する北白川遺跡群があげられる。それが標高24mほどの木津川沖積地の低位にも同時期の遺跡の存在が明らかとなった。それまでは、木津川市の燈籠寺遺跡における後期中葉～後葉に属する竪穴住居が確認されているにすぎなかった。これらの成果をあわせることで、薪遺跡は南山城における当該期の集落構造を検討できる重要な転換となったこととして評価される。さらに三山木遺跡から晩期の土器類が出土しており、当遺跡に近い山崎神社には縄文時代の石棒・異形石製品が御神体として伝わっていて、木津川左岸の綴喜郡域では、わずかであるが中期以降連続と人々の生活痕跡をたどれ、この時期に滋賀県から北山城を経て南山城に土器の伝搬した流路が確立したことが予想できるとの見解がある<sup>1)</sup>。なお晩期には稲葉遺跡・興戸遺跡から、長原式土器が発見されている。

弥生時代になると、前期のものとして、稲葉遺跡、宮ノ口遺跡、宮ノ下遺跡、三山木遺跡などが知られ、土器片などの遺物を確認している。その中でも稲葉遺跡では方形周溝墓が、宮ノ下遺跡では多量の土器類が発見され、当地域での拠点的な性格を有していたと考えられる。そのほか、木津川市燈籠寺遺跡から生駒西麓産の甕が、木津川市平尾湧出宮遺跡、精華町百久保

地先遺跡などでも、僅かながら遺物の出土が知られ、南山城においても同時期の遺跡が、小地域ごとに小規模であるが点在していることは、興味深い。

中期にいたると市西北丘陵新遺跡の西方の狼谷遺跡があり、昭和53年に実施された堀切古墳群の調査でも、同時期の遺物がわずかであるが発見されている。丘陵上にある田辺城下層で竪穴住居と方形周溝墓がセットで発見されたほか、近年、南山遺跡でこの時期の竪穴住居が16棟確認された。加えて、木津川市平尾湧出宮遺跡、精華町如ノ前遺跡に具体的な集落の存在が知られるようになる。木津川市相楽山では銅鐸が出土しており、その丘陵麓の大島遺跡では、竪穴住居と方形周溝墓がセットになって確認され、集落と祭祀のあり方を知ることができる。

後期には、遺跡の分布が拡大し、南山城一帯で確認される。しかも城陽市森山遺跡、木津川市平尾城山遺跡・燈籠寺遺跡・木津城山遺跡、京田辺市飯岡遺跡、同田辺天神山遺跡など、山頂部や丘陵上に立地する高地性集落が顕著となる。また、飯岡遺跡、興戸古墳群などで方形周溝墓・方形台状墓が発見され、墓域が高所でも造営される。

このような弥生時代における遺跡動向のなかで、古墳時代になると、にわかに状況が一変する。なかでも木津川右岸の木津川市山城町には、前期初頭の畿内を代表する出現期の椿井大塚山古墳（大型前方後円墳、全長175m前後）が築造され、奈良県の古墳を除くと傑出した規模を誇る。この古墳からは37面以上の鏡が出土し、これらはすべて中国製であり、そのうち33面が三角縁神獣鏡であった。小林行雄はこれらの鏡は、九州から関東にいたる広範囲に分布する古墳から出土した鏡に同范関係があることを明らかにしたのである。そしてこのような多数の同范鏡を埋葬された椿井大塚山古墳の被葬者は、各地の首長にこれらの鏡を配布した大和政権の使臣と推論した同范鏡論を主張したことでつとに有名である。その後、前期中頃の平尾城山古墳（大型前方後円墳、全長110m）と墳丘規模は縮小傾向にあるが、有力首長層の大型古墳築造が続く。しかしながらそれ以降、相楽東部の椿井古墳群での大型墳はなく、それに続く城山古墳脇にある北河原稻荷山古墳（円墳、直径33m）が僅かに存在するにすぎず、墳丘規模や形状のみならず首長墓の存在そのものは急激に消滅する。

このような相楽東部の趨勢の中で前期後半になると、綴喜郡の木津川左岸域は、大型前方後円墳・前方後円墳などが、南北に細長く散在しながら分布する。そのなかで薪地区一帯をふくむ綴喜西部においては、旧郷と対比しながら、八幡、大住、田辺、三山木のグループごとに、その墳墓や集落の動向について、首長墓との関連を含めて概観してみる。



第3図 稲葉遺跡方形周溝墓（北から）



第4図 大住南塚古墳・大住車塚古墳

このうち大規模な首長墓を築造するのは、八幡・大住グループである。八幡市の石不動古墳（前方後円墳、墳丘長88m）・茶臼山古墳（前方後方墳、墳丘長50m）・西車塚古墳（前方後円墳、墳丘長114m）・東車塚古墳（前方後円墳、墳丘長推定90m）・ヒル塚古墳（方墳、一辺52m）、京田辺市大住には大住南塚古墳（前方後方墳、墳丘長71m）、同車塚古墳（前方後方墳、墳丘長66m）、同市飯岡に飯岡車塚古墳（前方後円墳、墳丘長90m）がそれぞれ築造される。これらの古墳はすべて段築、葺石、埴輪を備え、茶臼山古墳・西車塚古墳・大住南塚古墳・飯岡

車塚古墳の埋葬施設に竪穴式石槨が採用され、その方位は大住車塚古墳・南塚古墳が北西から南東に振れる以外、東西方向が目立っている。このような墳丘規模や埋葬施設の状況から綴喜地域には、南山城でのこの時期優位に立った首長層が、小地域ごと存在していたことを物語っている。

そのなかで大住地区と飯岡地区の間の田辺地区には、小型であるが興戸1号墳（前方後円墳、墳丘長約24m）が築造され、ついで2号墳（円墳、径約27m）と続く。しかも興味深いのは、小形丸底壺が出土した興戸遺跡が、古墳群のすぐ東に存在することで、この時期の集落と墓域のあり方を知ることができる。

薪地区には上述した古墳より規模は小さいが、前期の郷土塚3号墳（墳丘形状不明）、中期の郷土塚2号墳（円墳）、天理山1号墳、後期の堀切7号墳（5号墳も同時期の可能性あり）などが築かれ、埴輪を伴う。この時期に相当する集落は、相楽郡境に近い宮ノ口遺跡があり、布留式甕や砥石などが出土した井戸が発見された。このほか京田辺市大切遺跡では弥生時代末期から古墳時代前期にかけてのものが発見されている。また八幡市内里八丁遺跡では前期から後期にいたる集落が拡がっている。

中期にはいと綴喜郡では八幡市美濃山大塚（前方後円墳）、それより遅れて京田辺市ゴロゴロ山古墳（円墳）、などが散見されるに過ぎない。その反面、木津川右岸の久津川古墳群での古墳造営が中心となり、その築造も丘陵上から平地部へと拡大する。

後期に至ると、薪を含む京田辺市西北部には北から城山古墳群、郷土塚古墳群、畑山古墳群、西山古墳群、堀切古墳群、小欠古墳群が丘陵の縁辺部に点在する。これらの古墳群は、数基～10数基の小規模なまとまりを形成しており、いずれも横穴式石室を内部主体とする。これらのうち幾つかの古墳が発掘調査され、郷土塚4号墳（円墳、直径16m）の横穴式石室内から鏡



治工房に関連する鉄釘、鉄槌が、畑山2号墳の横穴石室内から石棺に関連する凝灰岩片が、同3号墳から銅碗が、堀切1号墳の石室内及び墓道周辺から組合式家形石棺片、多数の須恵器とともに馬具、武器、鉄釘、ガラス玉などが出土している。これらの古墳群に関連すると想定されている薪遺跡において、近年調査がおこなわれた結果、同時期の竪穴住居が1棟のみであるが発見されたほか、古墳時代前期末から中期の円筒埴輪をもつ方墳や径16mの円墳に伴う周濠が確認され、薪遺跡内に埋没古墳の存在が明らかになった。このためこれらの古墳群に関連する集落は、薪遺跡に求めることも可能となった。少し範囲を広げてみると、八幡市の木津川緑辺に存在する弥生時代から平安時代にかけての集落として内里八丁遺跡があり、そこでは現在までに古墳時代中期～後期にかけての竪穴住居が26棟ほど確認されている。

後期末以降に至ると、堀切古墳群を含めた京田辺市の北西域から八幡市美濃山一帯にかけての飯岡、松井、堀切、荒坂、女谷、美濃山、狐谷に総数200基以上の横穴が分布し、府下最大規模を誇る横穴群密集地帯で知られている。このうち八幡市女谷・荒坂横穴群では52基が調査され、その結果から延長600mの範囲に100基以上の横穴が築造されていたことが予想され、南山城において最大規模を誇る。薪地区では堀切6号横穴から凝灰岩製の組合式家形石棺が出土し、埋葬遺体1体が残存していた。これらの平面形は「とっくり形」ないし「玄室と羨道の区別のない逆台形」で、天井部は「かまぼこ形」の形式を採用している。これらに埋葬された人物として、大住が「綴喜郡大住郷」に想定され、文献史により単人の存在が明らかにされていることや、堀切7号墳から直弧文風の刺青のある人物埴輪が出土することから、大隅単人との関連が指摘されている。しかしながらそれを裏付ける具体的な考古資料は未だ発見されていない。ただし内里八丁遺跡と女谷・荒坂横穴群との間に位置し、八幡市と京田辺市にまたがる広大な集落の新田遺跡では、古墳時代後期から飛鳥時代に至る竪穴住居や溝などが確認され、そのうち古墳時代後期の竪穴住居は現在まで10数棟確認されている。この新田遺跡の古墳時代後期の竪穴住居群は、女谷・荒坂横穴群と極めて密接な関係が予想され、その築造に携わった人々の集落の可能性が指摘されている。

綴喜郡は、『日本書紀』仁徳天皇三十年九月条に磐之媛皇后が「更に山背に還りて、宮室を筒城岡の南に興りて」とあり、継体天皇五年十月条に「都を山背の筒城に遷す」とみえることから、かつて綴喜は「筒城」と呼ばれていたことが知られる。



第5図 筒城宮跡碑（同志社大学校内）

現在の同志社大学校田辺校地内の一画に筒城宮伝承地を示す石碑が設置されている。その後『続日本紀』和銅四年(711)正月二日条に「綴喜郡山本駅」とあることや、同天平神護元年(765)八月一日条にも「綴喜郡松井村」などから、奈良時代初頭には綴喜郡に改められていたことがうかがえる。本郡は10世紀前半源順により編纂された『和名類聚抄』によると、山本・多可(多河)・田原(多八良)・中村・綴喜(豆々木)・志磨・大住・有智・甲作・余戸の10郷の名が知られる。このうち余戸については疑問が提示されている。これらのなかで、北部の一部が城陽市に編入されたため、綴喜郡は宇治田原町、井手町、京田辺市、八幡市に相当し、総面積143.59㎢に及んでいる。これらの文献史料と関連して、近年調査された薪遺跡において、奈良時代の大形掘立柱建物群や土壇、平安時代の道、溝、土壇などが発見されている。ただしこれらの遺構群は、古代山陰道から250mほど離れていることから、官衙か私的な施設(私邸)かは、性格を決定するまでに至っていない。

平安京造営に際して、薪地区の西方に位置する甘南備山は、平安京の南北軸南の基準点に相当することが歴史地理学の研究により明らかにされている。山頂には宝亀二年(771)神封一戸を寄せられた文書が残り、明治10年(1877)6月延喜式内社と決定された神南備神社が祀られる。その東側の谷には天平年間僧行基が創立したといわれている神奈備寺が立地する。また丘陵東裾には延喜式内社棚倉孫神社が鎮座するなど、祭祀や信仰に関して極めて重要な地域であった。そして薪地区東方にひろがる沖積地には、石清水八幡宮の神事用の薪を納めた薪御園あるいは薪荘と称された荘園があり、嘉禎元年(1235)以降に、近接する興福寺領大住荘との間で用水を巡った幾度の争いが繰り広げられた地域として知られる。それに伴う遺跡として薪遺跡があり、9～14世紀にわたる遺物が出土する。そのうえ在地領主の館に付属すると考えられる圃池も発見され、そこでは13世紀後半～14世紀前半を中心とする多量の土師器や白磁四耳壺、青磁盤を伴う。この遺跡は現在の薪地区の集落と重複することから、現在まで当時の景観を維持し続けてきたといえよう。

室町時代に至ると、薪地区の丘陵東裾に一体宗純の隠居所として著名な願恩庵が営まれる。

このように遺跡の消長を概観してみると、薪地区一帯における古墳時代以降急激な遺跡の増加は、開発が著しく進行し、椿井大塚山古墳に代表されるように大和朝廷と極めて密接な関係があったことを示唆しており、南山城において重要な位置を占めていたことを物語っていると考えられる。

## Ⅲ 調査経過

### 1. 既往の調査と綴喜郡内の古墳研究の歩み

江戸時代において南山城の古墳に触れたものはほとんどみないが、そのなかで最初期として宝暦4年(1754)刊行の『山城名跡巡行志』があげられ、そのなかで「王墓」とか「塚」と記載されたものが散見できる。そして近代を迎えるに際し、南山城の木津川左岸での古墳に関するものとして、第1に嘉永元年(1848)5月序とする石清水宮工司長濱庄次著『男山考古録』があり、先駆的な業績といえる。これは江戸時代までの古記録・典籍類に基づき、石清水八幡宮を中心に男山周辺一帯の古跡を蒐集し、なかでも車塚などを取り上げ古墳として扱った極めて初期のものといえ、地域史として位置付けたことも大いに評価できる。

明治時代にいたると、吉田東悟による『大日本地名辞書』第二巻 上方で取り上げられ、明治38年(1905)岩井武俊は弱冠19才でありながら「山城国相楽綴喜両郡の古墳」と題する報文を『考古界』5編1号に投稿した。それは自身が精力的に南山城の遺跡に関して分布調査をおこなった成果を報告した内容であった。岩井はのちに大阪毎日新聞社に入社し、史学・考古学なども担当し、遺跡発掘を支援するなど、当時としては極めて希有な文化活動を担った人物であり、その業績は多大なものであった。ついで荒川真造・伊東誠太郎らが中心となり、明治41年に刊行された京都府教育会綴喜郡部会編とした『山城綴喜郡誌』がある。この著作は他の京都府下の郡が大正4年の大正天皇御大典を記念した事業の一環として郡誌の編纂が行われたことよりも、それに先んじて企画・刊行されたことは特筆すべきことであったといえる。しかもその中には、八幡市東・西車塚、普賢寺下司塚、大住大師塚、同車塚、青谷古墳など個別に解説が加えられ、内容も詳述されており、南山城地域の古墳群を把握する上で重要な業績となった。その背景として明治25年平安京遷都千百年事業における『平安通史』編纂を担当した湯本文彦が、府下の史跡および名勝に関しても綿密な踏査を行っており、その内容についての発表はないが、『山城綴喜郡誌』刊行に際し、記述内容に湯本の研究の影響が少なからずあったのではないかと推測される。

そして大正から戦前にかけて、当郡内の古墳研究は、京都大学梅原末治により著しい進捗をみる。梅原は、大正3年(1914)『人類学雑誌』29巻12号に「山城の古墳墓」、同5年(1916)『考古学雑誌』6巻9号に「山城綴喜郡茶白山古墳と其発掘物」と題する論文を相次ぎ公表した。その梅原の業績により初めて近代考古学による山城における古墳調査と出土遺物に関する検討が加えられたのである。そして大正7年(1918)には京都史蹟会刊による「山城古墳横穴一覧表」を公表し、山城における古墳ならびに横穴に関する資料を集成し、初めてその全容を明らかにした。その後も梅原は精力的に調査を行い、その都度論文を発表し、昭和18年には京都府史蹟調査会と京都大学合同で、田辺地区の寿命寺古墳の調査もてがけ、当地域での前期古墳の実態を明らかにし、昭和30年(1955)刊行『京都府文化財調査報告』第21冊に「田辺町興戸の古墳」

と題して報告し、古墳研究を深化させた。それに加えて梅原は井手寺や三山木庵寺などの古代寺院に関する研究をも併せて行い、南山城の古代史研究の牽引車としての役割を果たしたのである。このように学術面で研究が進行する中で、戦後間もない昭和31年(1956)3月に田辺郷土史会が発足する。発足後の第一年次目は、古墳研究をテーマに、毎月1回現地見学会を開催して、縦喜郡内の遺跡踏査を進めていった。その際古代学研究会代表の宇佐晋一をはじめ、会員の小川敏夫、星野猷二、山田良三、石部正志らの考古学研究者も参加協力し、会の運営を補佐したのである。そして昭和31年(1956)郷土史会秋期総会において「古墳に関する展覧会」を開催し、広く人々にその成果を公表した。これらの活動を通じて、従来明らかでなかった小欠古墳群、堀切古墳群、畑山遺跡、西山古墳群、天理山古墳などの後期に属する古墳群・群集墳の存在を明らかにし、南山城でも有数の古墳密集地域として知られるようになった。この成果は会長村田太平、副会長西村正富のほか、西川滋、村井博、古川章の3委員を中心に刊行された、村田太平編『田辺町郷土史—古代篇』として昭和34年に結実する。その当時は埋蔵文化財に関する法令や調査研究、遺跡地図など不整備な体制下の中で、地域の遺跡に関する研究を町民の手で行ったことは特筆すべきことといえる。その上行政もその企画に参画し、遺跡の表示なども行ない、町民に対する普及啓蒙をすすめたことは、遺跡を社会教育の一つに位置づけたことといえ、重要な役割を持った対応といえよう。そしてそれは昭和43年(1968)発行の村田太平編『京都府田辺町史』として継承され、町史の中に位置づけられる。

このように地域史として遺跡の周知がはかられる中、1968年頃から京都府教育委員会による本格的な行政主導の発掘調査が開始され始める。それに加えて、龍谷大学文学部考古学資料室の手により、南山城地域の古墳の分布調査・測量調査も開始され、併せてそれに関連した論文も公表されていく。それらの集大成ともいえるものに、「南山城の古墳」として総括した和田晴吾の業績があげられる(和田晴吾「南山城の古墳」『京都地域研究』Vol.4、1988)。そして地域を縦喜西部、相楽西部、相楽東部、縦喜東部、久世の5地域に分け、古墳の時期区分を、前期から終末期の4時期に区分し、さらに前期を1期から4期まで、中期を5・6期から8期まで、後期を9期から11期、終末期を12期と細分した。その結果当地域での古墳の動向について、古墳時代を前期前半、前期後半、中期、後期前半、後期後半の5段階に把握することが適切であるとし、各段階での古墳の性格、画期の意義などについて論述したのである。また南山城地域における古墳全体を扱ったものに、近藤義郎が編者となった『前方後円墳集成 近畿編』がある。そこでは「古墳の形と規模と古墳群の消長を中心に、まず地域ごとに概観し、続いてそれを時期的に整理し、最後に各時期の古墳の政治階層的構成を検討したい」とするものであった。それを担当した和田晴吾は、これまでの研究成果を踏まえ、古墳群単位での動向を重視しつつ、5段階に整理した。その結果、第2段階で一定の地域的まとまりをもって存在した古墳群が、第3段階では、西山城と南山城の2つの地域的なまとまりとなり、「とりわけ大形・超大形前方後円墳の系列を地域的大首長とすると、ヤマト政権を背景としたその権勢は、南山

城で突出しており、各地区の首長はそのもとに政治的に強固に編成されたものと考えられる」とした。このように南山城地域の古墳研究は、進捗していくなかで、それらと並行して奥村清一郎は、南山城の横穴に注目し、それらを検討した<sup>2)</sup>。また平良泰久は「南山城の後期古墳と氏族」を発表し、横穴と陶棺の分布地域に注目し、『和名抄』や『日本書紀』の記載から古代氏族との関連を探り、恭仁京東北の道など古代の幹道をとおして、南山城の開発の背景を探ろうとした<sup>3)</sup>。平良はその後南山城各市町村史の編纂に加わり、古代史と考古学的成果を地域史として捉え、南山城各地の古墳群の動向に注目し研究を深化していった<sup>4)</sup>。なお京田辺市薪地区の古墳時代の様相については高橋美久二が堀切古墳群と堀切7号墳出土の人物埴輪について分析を加え、隼人に関する記録と時期が異なり、顔面の入れ墨は近畿地方でも一般的な習俗であったことを指摘している<sup>5)</sup>。

## 2. 調査の経緯

(1) 試掘調査 すでに存在が明かな10・11号墳以外にも未発見の古墳等が存在する可能性があることから、開発区全域を対象として行った。踏査による表面観察ののち、古墳・横穴等が予想される丘陵稜線や丘陵斜面に7か所のトレンチを設定し、人力・重機で掘削を行った。稜線上では表土直下に地山が確認され、斜面では自然に上部から流れた堆積層が確認されたのみで、ともに遺物などの出土はなく、新たな古墳等の発見はなかったが、開発区北東部の薪神社と接する地点で、横穴が陥没したものとみられる窪地が確認されたので、その地点を新たに調査対象に加えることとしたほかは、10・11号墳の2基の古墳を調査対象とすることとした。

(2) 本調査 試掘調査の結果を受け、京田辺市教育委員会の指導に基づき、土地所有者である株式会社信和住宅、京田辺市教育委員会、安



第6図 試掘調査風景（南から）



第7図 堀切1号墳石室（南東から）

西工業株式会社三者による覚書を締結し、8月20日から現地調査を開始し、樹木等の伐採後、10・11号墳の位置する調査区の現況測量を実施した。

その結果10号墳は、直径23mほどの円墳とあることが再確認でき、しかもその半分以上が削平を受け保存状態がすこぶる良くないことが判明した。しかしながら墳丘の高まりは残存しており、何らかの遺構が遺

存していた可能性が予想された。一方11号墳では、平成17年度の調査の際墳丘規模と横穴式石室の掘形が確認されたが、盗掘坑がかなりの範囲に及んでいることから、遺存状況はあまり良くないことが予想された。

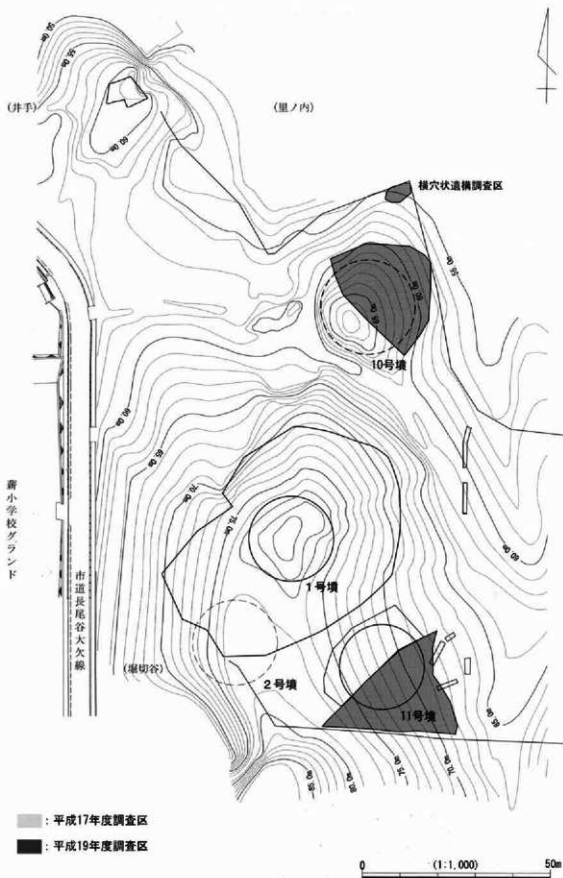
調査は、まず10号墳から開始した。遺存状態が悪いものの墳丘状の高まりは確認されたことから、何らかの遺構の存在が予想され、枯葉、後世の堆積土を除去するにつれ、墳丘の形状が徐々に明らかになってきた。その結果、墳丘の基層部は自然丘陵を削り出して形状を作り出し、北側には特にテラスを設けて、より形状が明瞭になるような構法を採用していたことが明らかとなった。しかし主体部に関しては、何らその痕跡を確認することはなかった。一方11号墳は盗掘穴のためその遺存状態がすこぶる悪いことが予想されていたが、枯葉、後世の堆積土を除去し、精査を行った結果、羨道部と排水溝の掘形等が確認され、



第8図 11号墳実測作業風景



第9図 堀切古墳群古墳・横穴分布図



第10図 調査区位置図

調査が進捗するにつれ、羨道部石積みの石材が姿をあらわし、しかも排水溝内からは石室ないしは羨道部から外に排出された遺物群が出土し始めた。そのためそれらを精査し、遺物の出土状況の写真、実測をおこない、記録作業を進めた。羨道部の両側壁の石材も遺存状況が良く、羨道部石積みの状況が把握できるようになった。その後全景写真撮影、測量をおこない、終了後遺物の取り上げ、羨道部石積みの裏込め状況を把握するための断ち割りをおこない、両古墳の調査を終了した。また横穴の可能性のある薪神社脇に調査区を設定し、調査をおこなったが、当初横穴と予想された空洞部は、それにはならず木の根等による自然にあいた痕跡であることが判明し、最終的に断ち割りをおこない、それを追認した。このことから堀切古墳群の横穴は、丘陵北端裾には構築されていなかった可能性が高く、10号墳西の1・2号横穴が存在するだけに過ぎないことがあきらかとなってきた。このように調査を進めそれぞれの補足調査による記録作業をおこない、11月2日に全ての現地作業を終了した。なお、発掘調査成果が一定程度明らかになってきたため、調査期間中の10月27日に一般市民を対象とした現地説明会を開催した。



第11図 現地説明会風景

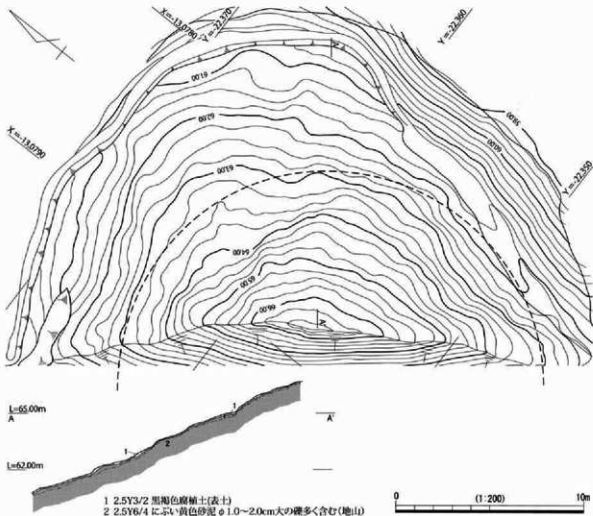


## IV 遺構・遺物

### 1. 堀切10号墳

古墳は、標高62.5m前後のウマノセ山塊群丘陵上に構築された古墳で、薪神社から南65m付近に存在する。墳丘は西側3分の2ほどが過去に大きく削平され、原形を留めていない。そのため墳丘の主軸は不明である。復元される規模は約23mとほぼ整円に近く、円墳と考えられる。残存する墳丘高は、2.7mを測る。堀切1号墳の墳丘高が2.7～2.9mであることから、本来の高さは残存高よりやや高かったことが予想される。墳丘裾には、残存した範囲内では周溝が確認できなかったため、存在については不確定である。また墳丘は段築成が見られず、葎石や埴輪の存在をうかがえるものはなかった。

**構築方法** 墳丘は丘陵尾根筋に立地し、地山を削り出して構築され、調査範囲内では盛土は確認されなかった。そのなかで丘陵先端、すなわち北東側で、墳丘裾にテラス状の平坦面を削り出し、墳丘と自然丘陵の傾斜面を意識的に区別させ、その存在を際出させる効果を演じている。



第12図 10号墳発掘後墳丘測量図・土層断面図



第13図 10号墳完掘後全景（北から）



第14図 10号墳完掘後全景（北東から）

## 2. 堀切11号墳

古墳はウマノセ山塊群丘陵尾根筋の東傾斜面上位の標高71m前後に所在する円墳である。ウマノセ山塊群北端尾根の1号墳の南東約40m、1号墳と10号墳の中位の標高に位置する。この古墳も墳丘は北西側3分の2ほどが宅地造成により大きく削平され、原形を留めていない。そのため墳丘の主軸は不明である。復元される規模は、長軸22.0m、短軸19.2mと南北にやや細長い楕円形を呈し、残存する墳丘高は、周溝最深部から約1.2m、墳丘北裾から2.5mを測る。墳丘裾には、丘陵頂部方向に平成17年度の試掘調査で基底幅2.0m、最深部で1.2mを測る、やや丸みのある断面逆台形の溝を確認している。そして今調査範囲内では墳丘が削平を受けているが、それと丘陵頂部境付近で尾根に直交するように、幅約2m、深さ0.2mの断面レンズ状を呈する周溝の一部が確認できた。しかしながらそれは墳丘と丘陵境の谷状部で消滅するため、全周していなかった可能性が高い。堆積土は黄褐色砂泥で、下部はやや粘性に富み、上部では径1～4cmの小礫を均一に含む。いずれも遺物の出土は認められなかった。また墳丘は段築成がみられず、葺石や埴輪の存在をうかがえるものはなかった。ただ墳丘東傾斜面には2条ほどの小礫群が遺物を伴って流れ落ちた形跡が確認でき、それが石室床面敷石の一部を構成していた可能性がある。なお遺物中には、二上山産の白色凝灰岩の破片が含まれていた。

**墳丘構築方法** 墳丘は丘陵傾斜面上位に立地し、これも地山を削り出して構築され、調査範囲内で盛土は確認されなかった。そのなかで丘陵谷側、すなわち東側墳丘裾にテラス状の平坦面を削り出し、墳丘と自然丘陵の傾斜面を意識的に区別させ、その存在を際出させる効果演技している。このような築造手法は、1号墳にもみられることから、堀切古墳群の墳丘は共通した築造手法を採用していたと考えられる。平成17年度調査において、墳丘北東側で最大0.9mの厚みの盛土を確認している。1号墳同様、尾根上部側を削平した掘削土を使用して、低位の尾根先端部を盛土整地して平坦面を形成した後、墳丘中心部から墳丘外側に向け、順次盛土整地を繰り返して墳丘を築造したと考えられる。

### (1) 埋葬施設の構造



第15図 11号墳調査前風景（北西から：平成17年度）



第16図 11号墳墳丘検出状況（西から）

今調査では玄室部を確認できなかったが、平成17年度調査で、堀切11号墳の横六式石室の玄室部を確認していることから、その概略を紹介する。

#### A 玄室部

玄室部は、ほとんどの石材は抜き取られており、掘形底部に0.3m前後の石材と土師質の陶棺片がわずかに散乱するに過ぎなかった。主軸は世界測地座標系南から39度前後東に振り、南東方向に開口する。石室掘形は大阪層群の砂礫層を削りぬき、石室の平面は長方形を呈す。玄室の長さは、基底部検出長3.3m、基底部幅2.6m、残存する壁体の高さは、最も良くとどめているところで1.4mを測り、壁面は約80度に外傾する斜面を呈す。西側裏込めの遺存状況は良く、幅約0.5mほどの控えを取っている。このことから玄室奥壁幅は、約1.2mに想定できる。掘形底部には、大阪層群の淡水性の粘土層を貼り床に使用している。掘形底面には、壁体石積み目の土台にした薄い置き土が確認できた。掘形底部と第2層中から須恵器高杯と土師質亀甲形陶棺片が散乱した状態で出土しているが、いずれも元位置を留めるものは認められなかった。しかしながら陶棺片がまとまって出土したことから、玄室内に陶棺を埋葬していたと考えられる。ただし今調査の結果から墳丘東側テラス、および墳丘東斜面落石流れ堆積中の礫石の大きさが径5～10cmほどで揃っていること、1号墳玄室床面の敷石施設に使用された礫群と極めて類似することなどを考え合わせると、これらの礫石群は、1号墳同様、玄室床面に使用された石材に推定され、礫床であった可能性が高い。

これらの成果と本調査で得られた所見を総合すると、玄室掘形長は、最大で6m弱ほどの規模になり、ほぼ1号墳の玄室掘形長6m（袖石幅を含む）の長さと同色なく、しかも玄室掘形幅も1号墳の玄室基底幅約2.8mと同ほに近い規模であり、1号墳に匹敵する規模の玄室であった可能性が高い。また羨道との取り付け関係から、左片袖式の横六式石室に想定できる。

#### B 羨道部

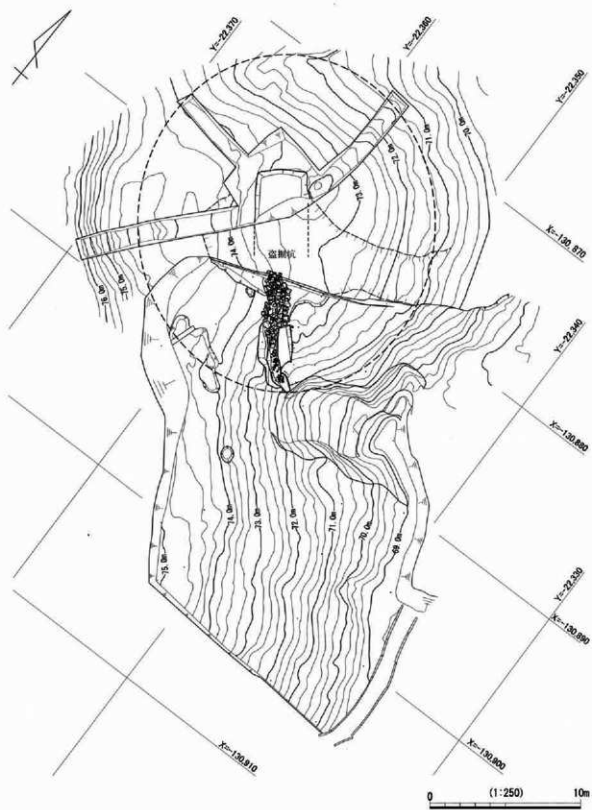
羨道は、長さ3.5m以上、内法幅0.8m、掘形幅2.2mの規模で、形状はほぼ直線的である。玄室と比較して石積みの残存状況は良いが、北半と北東隅の遺存は悪い。これは大正年間における石材抜き取りにより、破壊されたと考えられる。1号墳の壁面の石材と比較して、羨道の



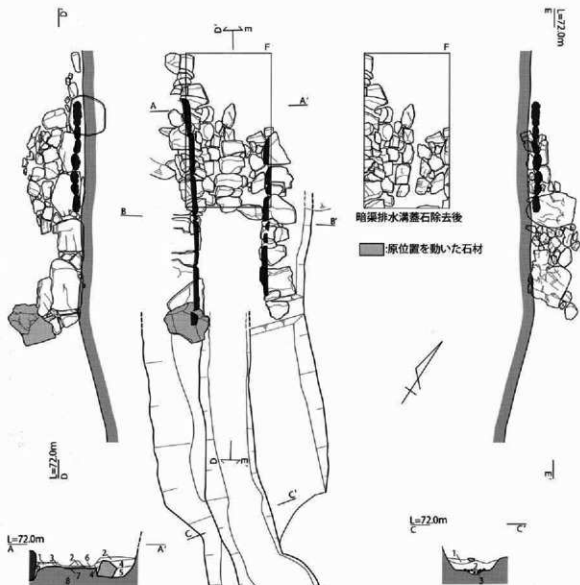
第17図 11号墳全景（南西から：平成17年度）



第18図 11号墳玄室掘形（南東から：平成17年度）

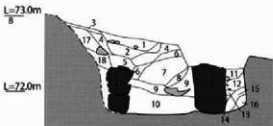


第19图 11号填丘测量图



1. 2.5Y7/4 浅黄色粗砂(φ2~5mm)少量含む
2. 2.5Y7/4 浅黄色粗砂(φ2~5mm)少量含む
3. 2.5Y6/4 濃い黄色砂(φ1~5mm)少量含む
4. 2.5Y6/4 濃い黄色砂(小礫をまじら含む)
5. 2.5Y7/6 明黄褐色砂(φ2~5mm)少量含む
6. 2.5Y7/4 浅黄色土
7. 10YR6/6 明黄褐色砂(φ0.5~1mm)少量含む
8. 10YR6/8 明黄褐色砂(混土)

1. 10YR6/8 明黄褐色砂(φ1~3mm)の砂礫やや多く含む
2. 10YR6/6 明黄褐色砂(φ1~3mm)の砂礫少量含む
3. 2.5Y6/6 明黄褐色砂(φ2~3mm)の砂礫多く含む



1. 7.5YR6/6 褐色砂(φ0.5~20mm)の礫多量に含む
2. 2.5Y7/6 明黄褐色砂(φ0.5~20mm)の礫多量に含む
3. 2.5Y7/6 明黄褐色砂(φ0.5~10mm)の礫多量に含む
4. 10YR6/8 明黄褐色砂(φ0.5~10mm)の礫多量に含む
5. 2.5Y7/6 明黄褐色砂(φ0.5~10mm)の礫多量に含む
6. 2.5Y7/6 明黄褐色砂(φ10mm)の礫やや多く含む
7. 2.5Y7/4 浅黄色砂(φ5mm)の礫、φ1~3mmの礫少量含む
8. 10YR6/6 明黄褐色砂(φ5mm)の礫少量含む
9. 10YR6/6 明黄褐色砂(やや粘質、炭化物を数粒に含む)
10. 10YR6/6 明黄褐色砂(小礫やや含む)
11. 10YR7/8 黄褐色砂(φ0.5~30mm)の礫多量に含む
12. 2.5YR5/6 黄褐色砂(やや粘質強い)
13. 2.5Y7/6 暗黄褐色砂
14. 10YR5/6 黄褐色砂
15. 2.5Y6/6 明黄褐色砂
16. 2.5Y7/4 浅黄色砂
17. 10YR6/6 明黄褐色砂
18. 17K比々中粘質強い

第20図 11号墳石室実測図・土層断面図



第21图 11号墳調査区全景（鉛直方向）



第22图 11号墳羨道部（鉛直方向）



第23図 11号墳羨道部（北西から）





第24図 11号墳狭道部（北東から）



第25図 11号墳狭道部（北西から）

それはやや大きいのが目立つ。羨道掘形底部の標高は71.7mを測り、玄室底部の置き土上面とほぼ近似した数値となっている。

東側壁 羨道の羨門付近と中央には、1段目のみが残存しており、幅0.5～0.7mのやや小ぶりの中型石材を使用した基底石が約1mの距離を隔てて縦位に据えられている。これらの底部には極小型の割り石をかまして安定を図っている。その上面の高さは、標高72.25m前後である。このような基底石を使用しているのが東側壁の特徴といえる。基底石間には、隙間を小型の割り石材で充填し、最上位にはそれよりやや大きめの石材を置いている。そして開口部から2.8mのところまで長さ30cm強の自然石を床面より深さ30cmまで転落した状態で確認した。そしてそれより北側は、大正年間における石材抜き取りによる攪乱が深く及んでいることから、当位置には、左片袖の袖石があった可能性が高い。

西側壁 基底石は東側に比べて、それよりも小さな幅0.4～0.6mの中型の石材を5石以上並べている。その上面の高さは、開口部に近い3石が標高72.1mと高く、ついでそれより北側は標高71.9～72.0m程度とある間隔ごとに低くなる傾向にある。その上開口部から5石目の石材の底は、他の4石と比較して0.3mほど深い掘形の底に置かれている。当初はそれが袖石に相当するのではないかと考えたが、側壁がさらに北に延びることから、なぜそうなっているかは不明といわざるを得ない。ただこの石の位置は、東側壁の袖石の位置と合致することから、それを意識して据えた可能性がある。壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。2段目の石材は、基底石よりも小さな幅0.4m程度、高さ0.15～0.2mの扁平な石材の長手方向を小口にして置き並べ、標高はほぼ72.2mとなっている。羨門から2石目は抜き取られているが、その痕跡からはほぼ同様な石材を使用していたことが考えられる。3段目の石材の残存状態は悪く、原位位置を留めているものは北寄りの部分の僅かに過ぎない。使用されている石材はさらに小さな小型石材を用いており、標高は72.6mほどに想定できる。このように、石材の使用方法が東西両側壁で大きな違いを見せている点が特徴的といえる。

床面 羨道底で床面が1面だけ確認され、地山直上に板状の石材が敷かれているにすぎない。

羨門 長軸0.8m、短軸0.15～0.5m、高さ0.35mの大型の自然石が出土したが、これは石材採取に伴い羨門内に落下した石材と考えられる。閉塞に伴う施設は何ら確認できなかった。

### C 排水溝

袖石から羨道開口部まで3.5mの長さで、内法幅0.08～0.15m前後、深さ0.15m前後の石組暗渠排水溝が設置されているが、開口部から1.3mまでは石が抜き取られていた。溝の主軸は羨道の方位軸とほぼ合致しており、羨門前面ではやや南東に緩やかな弧を描きながら、丘陵と墳丘間の谷状部に至っている。そしてそこでは素掘溝となり羨門から急に下がっていき、谷上部では、深さ0.3mを測り、溝幅も規模を増していく。なお羨門前から長さ1.2mにわたって、長軸0.3～0.4mの扁平な河原石がその上部を覆うように並んでいるように認められた。ただ両側壁の石列は認められなかったが、石材の配列状況から、この部分までは暗渠施設を有して



第26図 11号墳狭道部東側壁（南西から）



第27図 11号墳狭道部東側壁細部（南西から）



第28図 11号墳後道部西側壁（北東から）



第29図 11号墳後道部西側壁細部（北東から）



第30図 11号墳羨門前排水溝遺物出土状況図

いたと考えられる。

暗渠排水溝は、羨道床面を形成している地山を深さ0.2m弱ほど掘り込み、長軸0.15～0.3mほどの扁平な河原石を、左右両側壁に据え、その外側に0.05mほどの裏込めによる整地後、側壁の河原石間の上を横架するように、それよりやや大きめの同じく扁平な河原石を蓋石に使用している。これらのことから玄室内にしみ込んだ雨水は、置き土上面から緩やかに羨道暗渠排水溝に流れ込んで、羨門外に排水されたと考えられる。

#### D 遺物の出土状況

検出された横穴式石室の玄室部は既に失われており、羨道部だけが遺存していた。しかしながら、大正年間における石材抜き取りをはじめ、羨門付近での転落石の落下に伴う長径0.25～0.5mほどの自然石が床面に数多く確認され、それとともに攪乱・盗掘などにより、多くの遺物は原位置を保った状態では確認できなかった。しかしながら羨門前の石室内から延びる排水溝からは、追葬あるいは盗掘時の片付け跡と考えられる遺物群が、まとまった状態で確認することができた。



第31図 11号墳羨門前排水溝遺物出土状況①（南東から）



第32図 11号墳羨門前排水溝遺物出土状況②（北東から）

調査に際して、羨道部内を羨道の軸線を基準として、羨門部を起点に1m方眼の区画割りをおこない、それに基づき遺物の出土状況の観察・実測・取り上げをおこなった。しかしながら、羨道内からは、東側壁基底石側の床面より少し上位に浮いた状態で、須恵器杯身(3)・同杯蓋(4)・同無蓋高坏身(12)が確認されたに過ぎず、遺物の分布は極めて希薄であった。このうち杯蓋は、今回出土した須恵器群の中で後出の型式に想定されることは、注意が必要といえる。それに比較して羨門前から谷状部の落ち際までの約1.8mにわたって、須恵器・土師器などの遺物群が出土した。羨門に近いところでは破片であるのに対し、それ以外はいずれも完形に近く、正置ないしは逆置したものではなく、倒置されている。このことからこれらの遺物群は石室内より何らかの都合で、石室外に廃棄されたものといえる。谷状部落ち際付近からは、金属製品2点、陶棺片、下層からは凝灰岩片が出土した。

そのほか墳丘東側テラス、および墳丘東斜面落石流れ堆積中より、須恵器片・陶棺片・凝灰岩片が数点出土している。このうち凝灰岩片は、いずれも角が摩滅し風化が著しいことや、陶棺も小破片であることから、土砂内に埋没せずに自然風化を長期に受けていたと考えられる。なおこの落石箇所とテラス部の遺物出土地は大正年間の石材抜き取り箇所極めて近いことから、その際に石室外に取り出された残痕とも考えられ、2次的なものといえよう。これらとともに礫石群が密集して出土したが、玄室石材抜き取りの際、床面が取り除かれ、石室外に排出された石材の可能性が高い。

#### E 羨道部の石材材質

堀切古墳群中で最大規模の1号墳の横穴式石室の玄室石材材質の岩石学的調査を、2005年の発掘調査時に実施し、報告した。2007年の堀切古墳群第4次発掘調査が実施され、1号墳の南東に隣接し、第2位の規模の大きさの11号墳では、羨道部が検出されたので、肉眼観察での岩石学的調査を行ったので報告する。なお石材寸法については省略する。

**羨道部壁体石** 熱変成岩のホルンフェルスが圧倒的に多く、稀に珪岩、脈石英、黒雲母花崗岩がみられる。円磨度については、ホルンフェルスは0.1程度の極めて角張った角礫のものが圧倒的に多いが、まれに0.3～0.4程度の亜角～亜円礫がみられる。黒雲母花崗岩の円磨度は、0.1である。脈石英と珪岩は、0.1～0.3程度のものがみられる。

石材の産地については、本古墳群のすぐ南西側に甘南備山が広がり、ホルンフェルスが広く分布しており、山中の崖下に崩落した崖錐礫を多量に採取している。稀に山中の谷川に堆積した礫も採集している。珪岩、脈石英も、ホルンフェルスと同じと考えられる。黒雲母花崗岩は、甘南備山の南縁に分布するものが採取されたと考えられる。

**排水溝の石材** ホルンフェルスが多く、稀に珪岩、脈石英がみられる。これらの岩石は、いずれも円磨度は0.3～0.4のものが多く、0.1のものは少ない。このことから、本古墳直下の西から南西に伸びて甘南備山中に入る谷川に堆積した礫を採取したと考えられる。

**礫数の玉石** 直径5～10cmの礫が多く、岩石種としては、チャートが多く、円磨度は0.4

～0.6の垂円～円礫である。ホルンフェルスは少ない。このチャート礫は、本古墳群の地山の大阪層群の礫層が容易に採取可能であるため、採取されたと考える。量的には少ないホルンフェルス礫は、本古墳群直下の谷川に堆積した礫と考えられる。

本墳の築造部壁体石、排水溝の石材、礫敷の玉石の採取地は、1号墳とほぼ同じと考えられる。

本墳丘斜面に散乱する白色凝灰岩 本岩石片が数点出土しており、これは、奈良県と大阪府境付近の二上山の牡丹洞周辺に分布する二上層群下部ドンツルポー層から採石されたものと考えられる。1号墳からも同質の白色凝灰岩が出土している。下部ドンツルポー層崖の白色凝灰岩は、京都府下では京都市音戸山古墳群、向日市物集女車塚古墳等で出土するが、出土例は極めて少ない。

(京都府立山城郷土資料館 橋本清一)

## (2) 出土遺物

古墳時代の出土遺物としては、須恵器・土師器・陶棺・凝灰岩・金属製品があり、その他の遺物として、瓦器・陶器・近代瓦、サヌカイトの剥片などがある。

### A 須恵器

蓋・杯・無蓋高杯・有蓋高杯・台付長頸壺・広口壺・短頸壺・甕などがあり、このほか細片のため接合あるいは器種が推定できなかったものが若干見られる。

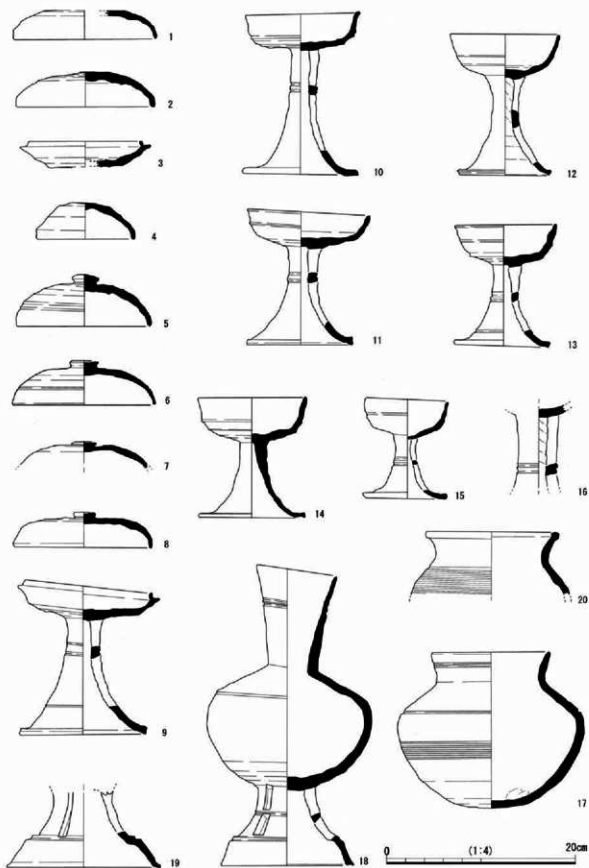
蓋(1・2・4) 口径10.1～15.2cm、器高3～4cm前後をはかる蓋で、いずれも杯身とセットをなしていたと考えられるものである。天井部上面には回転ヘラ削り調整が2/3前後に施されており、ほかの部分はいずれも回転ナデ調整が行われている。なお時期的には1・2が4より明らかに先行する。

杯身(3) 口径11.5cm、器高2.6cm前後をはかる杯身で、いずれも蓋とセットをなしていたと考えられ、今回の出土品では1・2の蓋が比較的近い時期のものである。たちあがりは低く内傾し、端部は丸く仕上げられている。底部は浅くわずかに丸みを持つ。底部外面には回転ヘラ切り調整が1/2前後に施されており、ほかの部分はいずれも回転ナデ調整が行われている。中央部を欠損する。

有蓋高杯蓋(5・6・7・8) 口径14.1～15.2cm、器高3.7～5.5cmをはかる有蓋高杯の蓋である。5・6は天井部が高く丸いが、8は天井部が低く丸みは少ない。いずれも天井中央部に扁平なつまみを貼付するが、5のほうが形状的には立体的で古式である。ともに天井部外面2/3に回転ヘラ削り調整、ほかは回転ナデ調整が施されている。いずれも天井部と口縁部との境の稜の痕跡は見られない。8は高杯9がセット関係をなすと考えられる。

有蓋高杯(9) 杯部の口径13.4cm、器高16.6cm、脚部底径13.5cm、脚基部径4.2cm、脚高12.3cmを各々はかる。杯部の底部は比較的浅くわずかに丸みを持つ。たちあがりは低く内傾し、端部は丸い。受部は水平に外方にのび丸みを持つ。杯底部1/2に回転ヘラ削り、ほかは回転ナデ調整が施されている。脚は長くその中位より上部に間隔をあけた粗な沈線2条、下位





第33图 11号填出土须惠器实测图

にも沈線1条がめぐる。上位の沈線を境に上下に縦方向二段二方向の長方形の透かし窓が穿たれている。脚は基部から外彎気味に外下方に下がり、端部で内側に曲げて内面に稜を認める。内外面ともに回転ナデ調整が行われている。

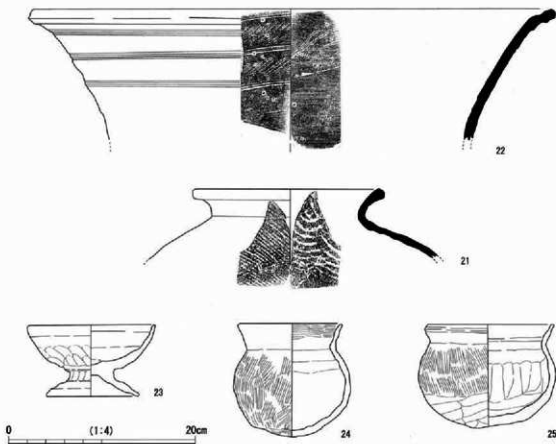
無蓋高杯(10・11・12・13・14・15) 10は杯部の口径11.8cm、器高17cm、脚部底径12.0cm、脚基部径3.1cm、脚高13.4cmを各々はかる。杯部の底部は比較的深く、平らで両端の口縁部は大きく外上方にのび、端部は丸い。底部と口縁部には2条の凸線がめぐるられ、底部は回転ヘラ削り調整が行われており、ほかはいずれも回転ナデ調整を行う。脚は長くその中位より上部に沈線2条がめぐり、それを境に上下に縦方向二段二方向の長方形の透かし窓が穿たれている。脚は基部から外彎気味に外下方に下がり、端部で内側に曲げて内面に稜を認める。内外面ともに回転ナデ調整が行われている。

11・12は10に比較して、やや器高が低く、脚も短い。このうち11は、杯部の口径13.0cm、器高14.2cm、脚部底径11.2cm、脚基部径4.2cm、脚高10.5cmを各々はかる。杯部の底部は比較的浅く、丸みを持つ。口縁部はなだらかに上外方にのび、端部は丸い。杯部口縁中位及び下位に低い凸線をめぐるせる。脚は長く、中位より上部に沈線2条をめぐるせる。その沈線を境に上下に縦方向二段二方向の長方形の透かし窓を穿つ。脚は基部細く、外彎気味に下方に下がり、端部は外傾する凹面をなす。脚先端部で内方に曲げて内側に稜を認める。杯底部2/3程度を回転ヘラケズリ調整、他は内外面ともに回転ナデ調整を行う。12の杯底部は深い。

13は11に比較して、やや小型の傾向を示す。杯部の口径10.8cm、器高12.9cm、脚部底径9.8cm、脚基部径3.2cm、脚高8.9cmを各々はかる。杯部の底部は深く、平らに近い。両端の口縁部は上外方にたちあがり、底部と口縁部は大きく屈曲させ端部は丸い。口縁部外面上位および底部との境に凸線1条を巡らせている。杯部の底部はほぼ全面に回転ヘラ削り調整が行われており、ほかはいずれも回転ナデ調整を行う。脚は長くそのほぼ中位に沈線2条、下位に1条がめぐり、上位の沈線を境に上下に縦方向二段二方向の長方形の透かし窓が穿たれている。脚は基部から外彎気味に外下方に下がり、端部は内傾する面をなす。内外面ともに回転ナデ調整が行われている。

14は13とほぼ同じ形態と見てよいが、透かし窓を伴わず、時期的にやや後出段階の可能性がある。杯部の口径11.1cm、器高12.8cm、脚部底径11.3cm、脚基部径2.9cm、脚高7.9cmを各々はかる。杯部の底部は深く平らに近い。両端の口縁部は上外方にたちあがり、端部は丸い。底部と口縁部は大きく屈曲させており、口縁部外面中、下位に凸線各1条を巡らせている。杯部の底部は2/3以上に回転ヘラ削り調整が行われており、ほかはいずれも回転ナデ調整を行う。脚は長く基部から外彎気味に外下方に下がり、端部で外傾する凹面をなす。内外面ともに回転ナデ調整が行われている。

15は最も小型である。杯部の口径8.6cm、器高10.5cm、脚部底径8.6cm、脚基部径2.5cm、脚高6.5cmをはかる。杯部の底部は深く丸い。両端の口縁部は内彎気味に上外方にたちあがり



第34図 11号墳出土須恵器・土師器実測図

端部は丸い。底部と口縁部はなだらかなカーブを描き、口縁部外面中位に沈線1条を巡らせている。杯部の内外面はいずれも回転ナデ調整を行う。脚は長くそのほぼ中位に沈線2条、下位に1条がめぐり、沈線を境に上下に縦方向二段二方向の長方形の透かし窓が穿たれている。脚は基部から外彎気味に外下方に下がり、端部は内傾する面をなす。内外面ともに回転ナデ調整が行われている。

高杯脚部片 (16) 高杯の脚部の一部と見られる破片である。脚基部付近の破片で、中位にめぐり沈線は明瞭で、その上位に穿たれている透かし窓は、縦二段二方向であるが、ほかの出土例に比較してもっとも長く古式の様相を呈している。脚内面には絞目跡の痕跡が確認される。無蓋、有蓋の区別はできない。

短頸壺 (17) 復元口径12.2cm、残存高16.6cm、体部最大径19.8cmをはかる。口頸基部は太く外反して上外方にのび端部は丸い。体部外面中位に沈線を巡らせている。体部外面は回転カキ目のち回転ナデ調整、底部外面付近はヘラケズリを施す。体部内面は回転ナデ調整を行う。

台付長頸壺 (18・19) 18は口径8.5cm、器高31.5cm、脚部底径14.0cm、脚基部径6.2cm、脚高8.3cmを各々はかる。口頸部は基部細く上外方になだらかにのび、端部は丸い。外面上位に浅い沈線2条を巡らせている。外面には成形段階に生じた絞目痕跡が認められる。体部は中位に最大径を有する球体をなし、底部は丸く、肩の張りは見られない。肩部に沈線1条を巡ら

す。底部には回転ヘラ削り調整、ほかはいずれも回転ナデ調整を施す。体底部に基部の細い外反する台脚を貼付する。脚は外反した後大きく段をなし端部へ至る。端部は内傾する凹面をなす。基部から下方に縦二段、三方向のほぼ長方形の透かし窓を穿つ。脚外面上位1/3に沈線2条を巡らせる。なお当該遺物は、溝谷状部落ち口（二次堆積）、溝などからの出土品と接合されてほぼ完形となったもので、破損後、旧位置から大きく移動されていた可能性がある。

19は脚部のみが残存である。脚には縦二段三方向の長方形透かし窓が穿たれている。基部はやや太く復元されるがゆがみや誤差があり、18と近似する形状となる可能性もある。

広口壺(20・21)20は復元口径13.3cm、残存高6.7cmをはかる。口頸部は基部太く外反して上外方にのび、端部付近で大きく左右に肥厚させ、端部は丸く玉縁状に仕上げている。体部は基部からなだらかに下がるが上位で欠損。外面には基部から下位に回転カキ目調整が施されている。その他の破片の中にも当該品の一部と見られる破片が含まれており、本来完形で供給されていた可能性が高い。

21は復元口径19.6cm、残存高7.0cmをはかるやや大型の広口壺である。口頸部は基部太く、外反して上外方にのび、端部で肥厚し、丸く仕上げている。体部は最大径を中位に求める球体と考えられるが、上位で欠損。

甕(22)復元口径55.8cm、残存高13.5cmをはかる甕口縁部の破片である。基部太く外反し端部付近で段をなす。外面上位と中位に沈線を各2条めぐらせ、その間にヘラ描き刺突文(列点文)を配する。さらにそれらの下方、及び内面には回転カキ目調整を施す。

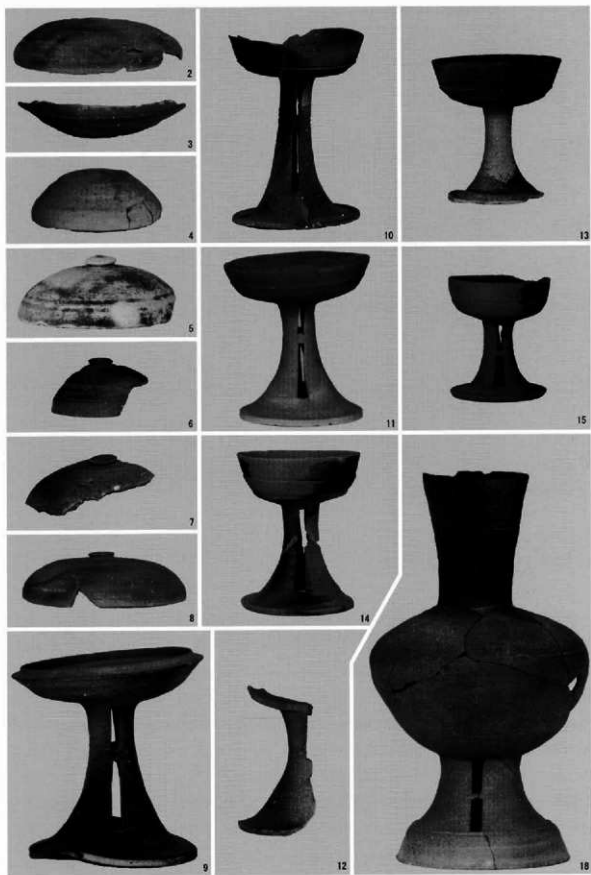
その他の破片 いずれも甕あるいは広口壺の体部と考えられる破片で、接合可能なものが少ない。外面には平行甲き、内面には同心円紋の当て具痕が認められる。また焼成度合いについても良好なものから甘く軟質なものまで多様である。

## B 土師器

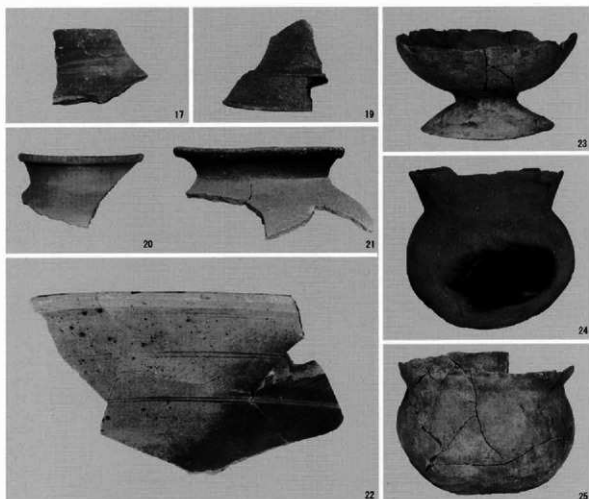
高杯(23)口径13.5cm、器高7.6cm、脚部底径10.0cm、脚基部径4.9cm、脚高2.9cmを各々はかる。杯底部は比較的深く丸い。口縁部は内彎気味に上方にのび、端部は丸い。外面に縦方向のナデ調整の痕跡が残されているほかは、いずれも横方向の回転を利用しないナデ調整が見られる。底部に基部の太い低い外反する脚を貼付する。脚基部付近には縦方向のナデ調整が見られるほかは、横方向のナデ調整である。

甕(24)口径11.0cm、器高12.0cmをはかる小型の甕である。口頸部は太く外反して端部に至る。端部は丸く仕上げられている。体部は最大径を中位に求める球体をなし、底部は丸い。外面には刷毛目調整の痕跡が残されており、内面には斜方向のナデ調整が行われている。

甕(25)口径13.6cm、器高10.7cmをはかる小型の甕である。甕23に比較してやや大きく、口頸部は太く外反して端部に至る。端部は丸く仕上げられている。体部は最大径を中位に求める球体をなし、底部は丸い。外面には刷毛目調整の痕跡が残されており、底部付近はヘラケズリを行う。内面には斜方向の板ナデ調整が行われている。



第35图 11号墳出土須惠器

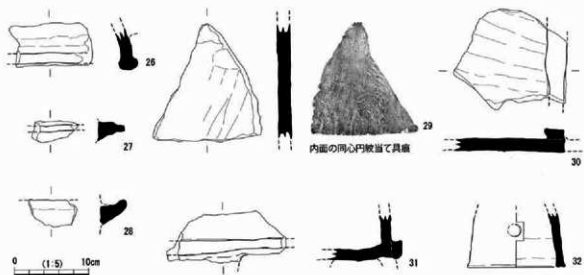


第36図 11号墳出土須恵器・土師器

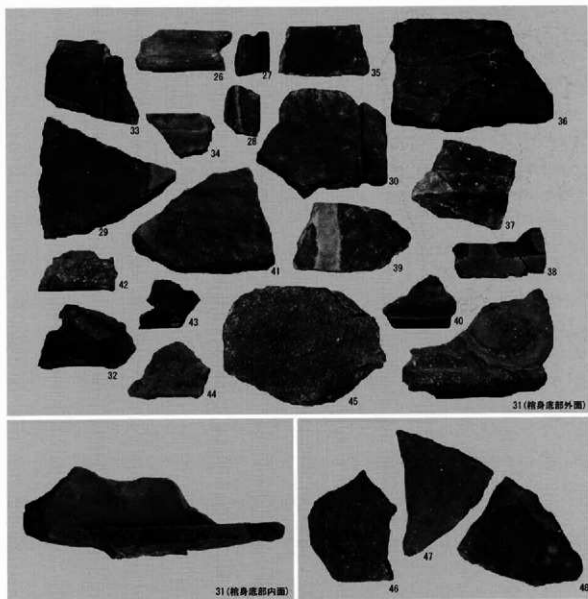
その他の破片 以上の復元された土師器のほかに、全形を復元できる状態にないが、袋状の体部をもつ土師器長頸壺が1点出土している。

### C 陶棺

土師質亀甲形陶棺片は45点出土し、すべて同一個体と考えられる。内訳は棺蓋3点、棺身体部27点（端部、鐙を含む）、棺身底部7点、脚部7点、不明1点で、棺蓋の破片が少ないのが目立つ。これらは円筒形の脚を備え、棺身・棺蓋からなるものである。棺全体の表面には、横および縦方向に方形に画する突帯が付く。突帯間の長さが判明するものはないが、横方向で18.0cm以上、棺身の縦方向は14.0cm以上、棺蓋の縦方向は14.0cm以上を測る。平成17年度調査で出土した陶棺の観察結果から、棺身・棺蓋は少なくとも上下2段以上か、もしくは3段に画された可能性が指摘されている。突帯幅は棺身を1.7～2.7cm、出は1.4～1.7cmを測る。さらに棺蓋には、円形・楕円形透かし孔が3穴以上穿かれている。棺身上端部外面よりやや下方には、斜め方向に2.8cmほど張り出しながら屈曲する突出した鐙が取り付け、棺蓋下端部を受ける。同様に、棺蓋下端外面やや上方に水平に3.8cmほど張り出すやや厚みのある庇状の鐙がある。器壁厚は、棺蓋で1.3～1.5cm、棺身を1.4～1.8cm、棺身底部は



第37図 11号墳出土陶棺実測図



第38図 11号墳出土陶棺

1.3cmとやや薄い。底部外面には円筒形の脚が付くが行列数は不明である。筒の下端部から上方4.3cmほどのところに2対、4穴あり、径1.5cmの円形透かし孔を穿っていて、下端部はやや肥厚する。脚の底径は13.7cm、高さ約9cmほどである。脚の器壁厚は0.9～1.1cmで上部の方がやや厚い傾向にある。

器壁の成形は、粘土紐積み上げで、相互は内傾接合が認められる。接合後その付近を叩き調整し、内面には同心円紋の当て具痕をとどめる。外面の調整は、板状工具により、少し斜めに横方向にナデを丁寧に施し、内面は指で押圧したのち、ナデる。突帯は器壁との接合面を平滑にしたのち、板状工具でタテ方向に、ランダムに刻み目を施す。そして貼り付けたのち、突帯の両側面をヨコナデする。ただし上端部は強くヨコナデするために凹面を呈する。突帯端面は板状工具による押圧とやや斜め方向のナデにより平滑に仕上げている。器壁の色調は、内外面とも灰黒色を呈し、軟質であるが、土師質というより、瓦質に近い。

なお底部外面は無数の細かな鱗状の亀裂痕が、脚上半には過度の加熱による表面剥離がみられ、その反面脚下端はそれほど顕著にみられない。このことから、焼成時に直接下方より火を受けていたことが予想され、このことから棺を正置状態にし、何らかの敷台の上に脚を乗せて焼成されたと考えられる。

26は端部が角形に肥厚する棺蓋の下端部、27は棺蓋下端外面に取り付く庇状の突帯片。28は棺身受け部の突帯で、33は断面やや内傾することから、棺蓋中位の破片と考えられる。34は棺身上端部である。これらはいずれも小破片である。29・30・35～39・41・45までは棺身体部片である。このうち29・30・41の内面には同心円文の当て具痕をとどめる。38は縦と横方向の突帯が交差する小片、37は横方向の突帯が付くもので、それ以外は、縦方向の突帯が付くものである。31は底部と体部が屈曲する棺身四角の一部のやや大きな破片で、屈曲部外面に横方向の突帯が付く。残存長16cm以上×12cm以上を測る。40は31と同様に棺身底部と体部の屈曲部の破片である。32・42～44は脚部片で、32は4分の1をとどめる。

これらの破片のなかで注意すべきものに底部と体部の屈曲のある31がある。この底部外面には脚の接合痕跡を留めている。これまでの陶棺研究の中で土師質亀甲形陶棺の製作工程について次のように考えられている。

脚 円筒埴輪などと同じく、輪積み法でおこなう。粘土紐を巻き上げ、中空円筒形のものを作り、外面粗いハケ調整、内面ナデ調整をおこなう。上端部は内側に2～3cm折り曲げるが、それは身の底部との接合面を広くし、接着を良くするためと考えられている。

#### 身の底部と脚の接合

- a. 作業面に脚を並び立てる。
- b. 脚の上端部に幅5～7cm、厚さ1～2cmのドーナツ状の粘土紐を巡らす。これは脚の径を小さくし、その中を埋める粘土及び底部との接合を良くするためである。
- c. ドーナツ状粘土紐のなかに、拳大よりやや大きめの粘土塊を押し込んで脚上面を塞ぎ底



部の素地とする。

d. 脚との底部との安定と接合を良くするため、補強粘土を脚の外側になでつける。

#### 底部の作成

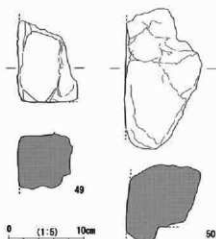
- 脚を中心にした円形の底部ができると、これらを粘土帯または粘土板で埋め、脚間を継ぎ合わせ底部をつくる。脚と脚との間の接合は、脚が2列の場合2本、3列の場合3本を一単位に、ブロック状につくるのである。
- 脚間から手で底の下側をなで、上側には薄く粘土を貼って底を補強し、なでつける。この場合下側に板をあてがうことがある。脚が2列で身の底部が広い場合には、脚間が広いと底部が下がり気味になる。
- 底部の縁を折り曲げ、この上に身を積み上げていく、折り曲げ部分は、内面を粘土で補強することが多い。

などとする（村上幸雄・橋本惣司「亀甲形陶棺の製作工程について」『考古学研究』第26巻第2号 1979年）。

今回出土した底部片は、観察の結果これとは少し製作工程が異なることが明らかになった。まず脚の調整は、内外面とも横方向のナデ調整することである。ついで上端の折り曲げは同様であるが、その幅が1cm強と狭い。次いで底部と脚の接合であるが、底部の作成のbとcが異なる。すなわち脚を立て並べた後、底部を乗せ、脚の位置に孔を開けて脚の径より大きな厚さ0.5cmほどの粘土板を上から押しつけ、接合する。その際脚の中空部が窪むため、さらにその上に厚さ0.7cmほどの粘土板を張り付けて、底部内面を平滑にする。また脚接合部外面にも折り曲げた部分に重なるように薄く補強粘土をなでつける。そして脚の外側にも補強粘土をなでつけるのである。このことから底部の作成のa行程を省略していることになり、合理化された製作方法を採用していることがうかがえる。

#### D 凝灰岩

小片が9点出土した（極小片は割愛）。いずれも二上山白石の組合式家形石棺片と考えられる。これらは、49が羨門前排水溝遺物集中部下層で出土した以外は、落石群中ならびにその付近より出土した。しかしその大部分は角が摩滅し、風化が著しく、かなりの間露出していたと考えられる。これらに対して49は、残存部10.8cm以上×7.9cm以上、厚さ7.3cm以上を測り、三方向に面取りの加工が施され、隅を呈している。その上平坦面を比較のとどめ、隅の直角が残存していて、破面もあまり風化を受けず破砕された後、土器群が石室内から廃棄された時期と相前後する早い時期で土中



第39図 11号墳出土凝灰岩片実測図

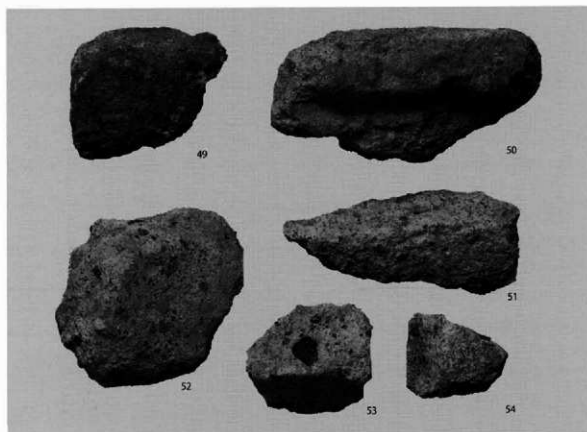
に埋没したと考えられる。このことから、わずか1点であるが、石棺片は他の箇所から持ち込まれたものではなく、11号墳の石室内に存在していた可能性が高い。51は残存長15.5cm以上、幅5cm以上、50は残存長18.4cm以上、幅9cm以上の棺蓋破片で、側面をとどめる。その端から幅4.0～4.5cmで帯状を呈して2cmほど段状に突出させる印籠蓋形式のものである。この部分と側石上端部をかみ合わせる。そのほかは径4～11cmの塊状を呈するが、53は面取りによる平坦面を一部とどめる。

#### E 金属製品

羨門前排水溝・谷状落ち込みより2点出土した。これらは先端・側面に折り返しのない板状のもので、本体・鋏とも鉄地である。55は方形状を呈し、幅2.0cm、長さ2cm以上、厚さ0.3cmで側を少し面取りしている。鋏状のものが、中央よりやや片方に寄りに1箇所に打たれ、0.7cm以上突き出ている。このような形態から全体の形状は長方形に推定され、鋏は相対する位置にもう1本ある可能性がある。なお鋏頭は剥離したのか、現状では突出していない。

56の形状は一方が半円形を呈し、もう片方は先端がやや細長く舌状を呈する。幅2.0cm、長さ3.2cm、厚さ0.3cmである。半円形の中央1箇所に頭径0.9cm、高さ0.5cmの半球形鋏を使用し、反対側に突き出ない。

これらは、現状から裏面には皮革が付着した跡は認められない。皮革端金具の可能性もあ



第40図 11号墳出土瀧灰岩片

るが、一応飾金具の一部と考えておきたい。

#### F その他の遺物

この他、細片のため図化しなかったが、鎌倉時代の瓦器椀片、近代以降の施釉陶器・棧瓦が墳丘テラス部から出土したほか、サヌカイト製の石器剥片が1点出土した。

瓦器は大和型瓦器碗の口縁部片で、内面にヘラミガキが密に施される。細片のため時期は不明。

平成17年度に実施した堀切1号墳の調査では、横穴式石室玄室内において、10世紀後半代の黒色土器A類椀の他、13世紀代の瓦器皿、中世の銭五枚を伴う小土坑を検出しており、石室が複数時期・複数回にわたって再利用されていたことが判明している。こうした状況から、11号墳においても、中世において石室の再利用が行われていた可能性が高いといえよう。

なお、サヌカイトの剥片に関しては、堀切古墳群に近接して縄文時代中期末の薪遺跡が知られており、剥片の出土はこれに関連したものと思われる。前回の調査と同様、今回も縄文時代・弥生時代に遡る遺構は確認できなかったが、古墳築造時における盛土採取や周溝掘削時に当該期の遺構が破壊されている可能性もあろう。

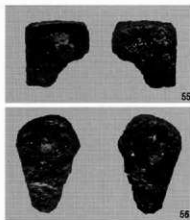
#### (3) 小 結

以上、11号墳で出土した遺物類について記述してきた。このうち須恵器および土師器に関して若干気づいた点を記述しておきたいと思う。須恵器はすでに見たように、蓋杯、高杯にはいくつかの形状の差が認められる。これらはその材料となった粘土に大きな差異が認められないことから同一ないしは近接地域からの供給と見られる。すなわち同一地域の生産地であれば、ここに見る形状の差異は製作工人によるものと考えられるよりは、時期的な差と見るのが妥当であろう。このように考えると、今回の出土須恵器には大きく3時期に区分可能と考えられる。すなわち蓋では、1, 2および杯3がほぼ同じで、蓋4がやや新しい。また高杯についてみれば、16が破片であるがもっとも先行し、ついで9, 10, 11, 12, 13, 14となり、15がもっとも新しくなる。なおこのグループでは10が先行し、13, 14がやや後出段階に分類してよいだろう。台付長頸壺は、これらのうちではもっとも先行するグループに分類される。広口壺についてはいずれも先行グループに分類することが可能である。

これらの区分によって最大4段階に区分可能であり、それらがいずれも相互に時期的な間隔を有しているとするれば、これらの観察から当該古墳の埋葬回数が4回という想定が可能となる。いずれにしても須恵器、土師器ともに旧位置からまったく移動せずに検出されたものではなく、攪乱を大いに被っている可能性が多いことをその残存状態が示唆している。したがって本稿の



第41図 11号墳出土鉄製品実測図



第42図 11号墳出土鉄製品

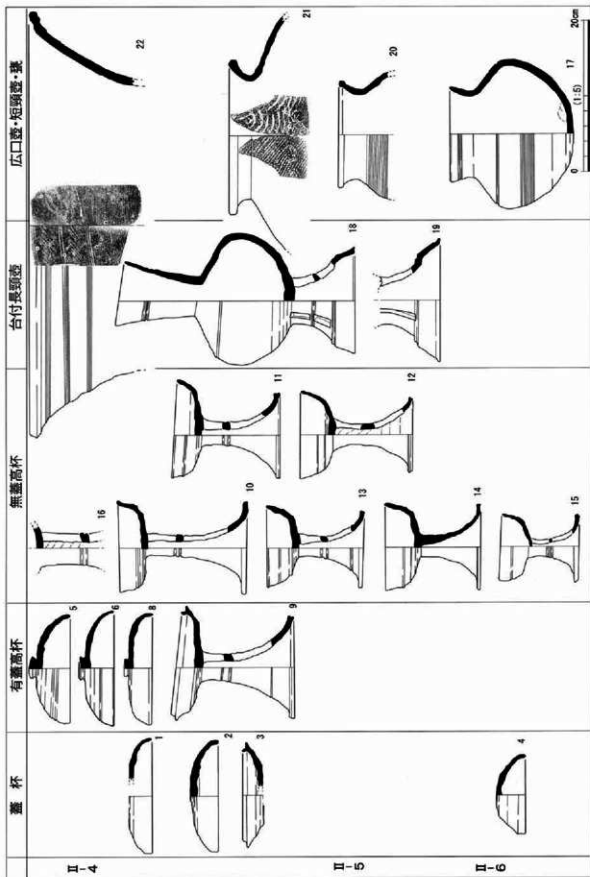


表1 11号墳出土土器類圖録

表2 11号墳出土遺物観察表(1)

図番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	施成	胎土	出土地	備考
1	蓋	復元口径15.2cm 残存高30cm	天井部は比較的低く、わずかに丸みを持つ。口縁部は天井部からならだらかに下がり、端部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形、天井部2/3に回転ヘラ削り調整。ほかは回転ナテ調整。	良好	やや粗	07HKF-2 11号墳 ①土器下NO17 07102 (56)	4点接合
2	蓋	口径14.3cm 器高38cm	天井部は比較的低く、わずかに丸みを持つ。口縁部は天井部からならだらかに下がり、端部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形、天井部2/3以上に回転ヘラ削り調整。ほかは回転ナテ調整。	やや甘く、軟質	やや粗	07HKF-2 11号墳 南スソ部(二次堆積) 07083 (14)	13点接合
3	杯	復元口径11.5cm 残存高2.6cm	たちあがりは長く内傾し、端部は丸い。底部は深く平らに凹み、受部は比較的長く上外方へのび、端部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形、底部は回転ヘラ削り・ほかは回転ナテ調整。	良好堅硬	粗	07HK 11号墳 東道内 071029 (36)	2点接合
4	蓋	口径10.1cm 器高49cm	口径は小さく、天井部は比較的高く丸い。口縁部は天井部からならだらかに下がり、端部付近で直下に下がり、端部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形、天井部1/3以下に回転ヘラ削り調整。ほかは回転ナテ調整。	良好	やや粗	07HK 11号墳 東道内 071017 (36)	4点接合
5	有蓋高杯蓋	口径14.1cm 器高55cm	天井部は比較的高く、丸みを持つ。天井部中央に中央がわずかに扁平な状態のつみみを付する。口縁部は天井部からならだらかに下がり、後の痕跡は見られない。口縁端部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形、天井部2/3以上に回転ヘラ削り調整を施す。ほかはいずれも回転ナテ調整。	甘く軟質	やや粗	07HK 11号墳 ①NO6 071102 (46)	3点接合
6	有蓋高杯蓋	復元口径15.2cm 器高47cm	天井部は比較的高く、丸みを持つ。天井部中央に扁平なつみみを付する。口縁部は天井部からならだらかに下がり、後の痕跡は見られない。口縁端部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形、天井部2/3に回転ヘラ削り調整を施す。天井部内面中央はナテ調整。ほかはいずれも回転ナテ調整。	良好堅硬	やや粗	07HK 11号墳 東道内 071102	3点接合
7	有蓋高杯蓋	残存口径9.0cm 残存高28cm	天井部中央に扁平なつみみを付する。	マキアゲ・ミズビキ成形、天井部2/3に回転ヘラ削り調整を施す。天井部内面中央はナテ調整。ほかはいずれも回転ナテ調整を施す。	良好堅硬	やや粗、最大3mmの白色砂粒を含む。	07HK 11号墳 南スソ部(二次堆積) 後中907003	
8	有蓋高杯蓋	口径14.3cm 器高37cm	天井部は比較的低く、わずかに丸みを持つ。天井部中央に中央がほとんど扁平なつみみを付する。口縁部は天井部からならだらかに下がり、端部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形、天井部2/3に回転ヘラ削り調整を施す。天井部内面中央はナテ調整。ほかはいずれも回転ナテ調整。	良好	やや粗	07HK 11号墳 NO107102 (44)	5点接合
9	有蓋高杯	口径13.6cm 器高16.6cm 脚底径13.5cm 脚基部径12cm 脚高12.3cm	杯底部は比較的浅く、わずかに丸みを持つ。たちあがりは長く内傾し、端部は丸い。受部は水平に外方へのび、端部は丸い。脚は長く、中位より上方に開閉をかけた重なり状の2条、下位にも1条をめぐらせる。上位の沈殿を境として上下に縦方向二段二方向の長方形造かし部を穿つ。脚は基部細く、外壁気味に下方に下がり、端部は外傾する四面をなす。また脚先端部で内方に曲げて内傾に横を認める。脚部にひずみ。	マキアゲ・ミズビキ成形、杯底部2/3に回転ヘラ削り調整。そのほかの部分はいずれも回転ナテ調整。	良好	やや粗、白色砂粒を含む。	07HK 11号墳 ①NO7 071102 (48)	
10	無蓋高杯	口径11.8cm 器高17.0cm 脚底径12.0cm 脚基部径3.1cm 脚高13.4cm	杯底部は比較的深く、わずかに丸みを持つ。口縁部はわずかに外傾気味に上方にたちあがり端部は丸い。杯部は脚中央および下位に凸線をめぐらせる。脚は長く、中位より上方に開閉を有する重なり状の2条を巡らせる。その沈殿を境に上下に縦方向二段二方向の長方形造かし部を穿つ。脚は基部細く、外壁気味に下方に下がり端部は外傾する四面をなす。	マキアゲ・ミズビキ成形、杯底部2/3に回転ヘラ削り調整。そのほかの部分はいずれも回転ナテ調整。	良好	やや粗、最大5mmの白色砂粒を含む。	07HKF-2 11号墳 南スソ部(二次堆積) 07083 (13)	7点接合

表3 11号墳出土遺物観察表(2)

11	無蓋高杯	口径130cm 器高142cm 脚底径112cm 脚基部径12cm 脚高105cm	杯底部は比較的浅く、丸みを持つ。口縁部はなだらかに上外方にのび端部は丸い。杯部1線中位および下位に低い凸線をめぐらせる。脚は長く、中位より上方に開張を有する粗な沈線2条をめぐらせる。その沈線を境として上下に縦方向二段二方向の長方形造かし意を穿つ。意は上位が狭く、下位は広い。脚は基部細く、外側突縁に下方に下がり、端部は外傾する凹面をなす。脚先端部で内方に曲げて内側に横を認める。	マキアゲ・ミズビキ成形、杯底部2/3に回転へつ削り調整、内底面にはナラ調整。そのほかの部分はいずれも回転ナラ調整。	良好	やや粗、ざらっとした感じする。	07HK 11号墳溝 ① NO9 071102 (5-1)	
12	無蓋高杯	復元口径116cm 器高150cm 復元脚底径100cm 復元脚基部径30cm 脚高105cm	杯底部は浅く、わずかに丸みを持つ。口縁部はわずかに内側突縁に上方にたちあがり端部は丸い。杯部1線中位に低い凸線をめぐらせる。脚基部細く、外側突縁に下方に下がり、端部で内傾する凹面をなす。上下に二段二方向の通かし意を穿つ。	マキアゲ・ミズビキ成形、回転ナラ調整。	良好	密	07HK 11号墳溝内 071027 (3-6)	3点接合
13	無蓋高杯	口径108cm 器高129cm 脚底径98cm 脚基部径32cm 脚高89cm	杯底部は深く、わずかに丸みを持つ。口縁部はわずかに内側突縁に上方にたちあがり端部は丸い。杯部1線中位および下位に低い凸線をめぐらせる。脚は比較的長く、中位に沈線2条、下位に糸をめぐらせる。その上方の沈線を境として上下に縦方向二段二方向の長方形造かし意を穿つ。上下の意はやや下方が広い。脚は基部細く、外側突縁に下方に下がり、端部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形、杯底部2/3に回転へつ削り調整。そのほかの部分はいずれも回転ナラ調整。	良好	やや粗	07HK 11号墳溝 ③ NO1 071101 (4-4)	10点接合
14	無蓋高杯	口径111cm 器高128cm 脚底径113cm 脚基部径29cm 脚高79cm	杯底部は深く、わずかに丸みを持つ。口縁部はわずかに内側突縁に上方にたちあがり端部は丸い。杯部1線中位および下位に低い凸線をめぐらせる。脚は比較的長く、基部細く、外側突縁になだらかに下がり、端部は外傾する凹面をなす。また脚先端部で内方に曲げて内側に横を認める。	マキアゲ・ミズビキ成形、杯底部2/3に回転へつ削り調整。そのほかの部分はいずれも回転ナラ調整。	良好	やや粗、2mm前後の白色砂粒を含む。	07HK 11号墳溝 ④ NO11 071102 (5-2)	
15	無蓋高杯	口径86cm 器高105cm 脚底径65cm 脚基部径25cm 脚高65cm	杯底部は深く丸い。口縁部はわずかに内側突縁に上方にたちあがり端部は丸い。杯部1線中位に沈線1条をめぐらせる。脚は比較的長く、中位に沈線2条、下位に糸をめぐらせる。その上方の沈線を境として上下に縦方向二段二方向の長方形造かし意を穿つ。基部細く、外側突縁になだらかに下がり、端部は外傾する面をなす。	マキアゲ・ミズビキ成形、いずれも回転ナラ調整。	良好	やや粗	07HK 11号墳溝 ① NO80 71102 (4-9)	
16	高杯脚部破片	残存高88cm 脚基部径12cm	脚基部から中位の破片。中位に沈線2条をめぐらせる。その上下に二段二方向の通かし意を穿つ。	マキアゲ・ミズビキ成形、内面に絞りの痕跡を残す。	良好	やや粗	07HK 11号墳 NO2 071102 (5-7)	
17	短頸甕	復元口径122cm 器高166cm 頸基部径115cm 体部最大径198cm	口縁部は基部太く、外反して上外方にのび端部は丸く仕上げている。口頸部中位に深い沈線2条を高くせらる。体部は基部からなだらかに下がり、体部最大径を中位よりやや上部に求める。	マキアゲ・ミズビキ成形、口頸部内外面ともに回転ナラ調整。体部中位付近に回転カキ目調整。体部下位から底部に回転へつ削りを施す。ほかはいずれも回転ナラ調整。	良好	密	07HK 11号墳 NO1掘り下げ 071004 (3-4)	12点接合

表4 11号墳出土土物観察表(3)

18	台付長敷板	口径8.5cm 器高11.5cm 胴基部径5.5cm 体部最大径17.4cm 脚基部径6.2cm 脚高8.3cm 脚底径14.0cm	口頸部は基部細く外反して上方へのび、肩部は丸い。胴は上位に沈凝2条をめぐらせる。体部は最大径を中位に求める球体をなし、底部は丸い。上位に沈凝1条をめぐらせる。底部中央に基部の脚を貼付する。脚は基部から外壁突出し下がり、さらに大きく角度を変えて外反する。上位1/3に沈凝1条をめぐらせ、それを境に上下に二段三方向の長方形透かし窓を穿つ。肩部の設置は外端部で、肩部は内傾する凹面をなす。	マキアゲ・ミズビキ成形、口頸部に絞り目調整が見られる。体部下位から基部に回転ヘラ調整、はかばか目調整。	良好	やや粗、白色砂粒を含む。	07HKF-2 11号墳南スツボ 070831 (1・2、 11号墳溝① NO0071102 (42)と統合
19	台付長筒密脚部破片	残存高8.0cm 脚基部径元径8.3cm 復元径元径17.5cm	台付長筒密脚部の破片。脚は基部から外壁突出し下がり、さらに大きく角度を変えて外反する。第二段三方向の長方形透かし窓を穿つ。肩部の設置は外端部で、肩部は内傾する凹面をなす。	マキアゲ・ミズビキ成形、回転ナゲ調整。	良好	密	07HK 11号墳溝 ①NO13 071102 (5・3)
20	広口壺	復元口径13.3cm 残存高6.7cm	口頸部は基部太く、外反して上方へのび、肩部で肥厚し、丸く仕上げている。体部は最大径を中位に求める球体と考えられるが、上位で欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形、回転ナゲ調整。体部外面に回転ナゲ調整。	良好	やや粗	07HKF-3、 11号墳、東横堀溝(のり面の盛り土) 070903
21	広口壺	復元口径19.6cm 残存高7.0cm	口頸部は基部太く、外反して上方へのび、肩部で肥厚し、丸く仕上げている。体部は最大径を中位に求める球体と考えられるが、上位で欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形、回転ナゲ調整。体部外面に平行押し、内面に円錐押し。	良好	やや粗	07HK 11号墳 NO1 掘り下 11071024 (3・4)
22	甕	復元口径55.8cm 残存高113.5cm	口頸部は基部太く、外反して上方へのび、肩部付近で段をなし、肩部はわずかに丸味をもつ。肩部外面上位から中位に合計3段2条の沈凝をめぐらせている。上位と中位の沈凝の間にはへうによる斜め列点文(刺交文)が見られる。中位以下には回転ナゲ調整を行う。	マキアゲ・ミズビキ成形、ヘラ描き列点文(刺交文)および回転ナゲ調整が内面全体と外面中位以下に見られるはかばか目調整。	良好	やや粗、2mm前後の白色砂粒を含む。	07HKF-2 11号墳南スツボ 070831 (1・6)
23	土師器高杯	口径13.5cm 器高7.9cm 脚底径10.0cm 脚基部径14.9cm 脚高2.9cm	杯底部は深く丸い、口頸部はわずかに内傾丸味に上方にたがみ脚部は太い。杯底部に脚を貼付する。脚は基部からは成線的に大きく外反する。	全体が回転を利用しないで成形されている。底部及び脚基部付近は縦針め方向のナゲ調整、ほかは横方向のナゲ調整が行なわれている。	良好	粗	07HKF-2 11号墳溝 (1NO16071102)
24	土師器甕	口径11.0cm 器高12.0cm	口頸部は基部太く、外反して上方へのび、肩部は丸い。体部は最大径を中位に求める球体をなし、底部は丸い。	マキアゲ成形、口頸部内面には横方向の刷毛目調整、体部外には不整方向の刷毛目調整、ほかは横方向のナゲ調整が行なわれている。黒炭が見られる。	やや甘く、軟質(土師器としては良好)	やや粗	07HKF-2 11号墳NO10 071102
25	土師器甕	口径13.6cm 器高10.7cm	口頸部は基部太く、外反して上方へのび、肩部は丸い。体部は最大径を中位に求める球体をなし、底部は丸い。口頸部にわずかに	マキアゲ成形、口頸部内面には横方向の刷毛目調整、体部外には不整方向の刷毛目調整、底部外面付近をヘラケズリ調整を行う。	やや甘く、軟質(土師器としては良好)	やや粗	07HKF-2 11号墳NO12 071102

観察結果からの類推は当を得ていない可能性もあろう。

また先に調査された1号墳の出土須恵器を比較すれば、併行関係にあるものや先行するもの、あるいは後出段階のものなど多様な状況を呈している。これは相互の古墳への追葬が複数回にわたって行われたことを示すものであり、とくに目立った現象とはいえない。

### 3. 横穴状遺構

ウマノセ山塊群北端裾の標高50.4m、薪神社の南30mのところを所在する。横穴状の遺構が3基東西に隣接しており、北に開口している。発掘調査時においていずれも土砂の堆積はほとんどなく、空洞状態であった。開口部の間口は、東から1.1m、0.9m、0.8mで、現存奥行き約0.5m、底部はほぼ平坦で、やや楕円形に類似した不定形の平面を呈す。天井部までの高さは各々残高0.6mを測り、断面は袋形を呈する。内部からはゴミ袋や屑などの現代の遺物が詰まった状態でみられた以外、それ以外の遺物は出土しなかった。堀切横穴群をはじめとする南山城の木津川左岸の八幡市南部から京田辺市北部にかけて点在する、八幡市美濃山横穴群、同女谷・荒坂横穴群、京田辺市松井横穴群などの横穴の形態や規模の比較や出土遺物から判断して、今回調査した横穴状遺構は、横穴と判断できる根拠をみだせず、なおかつ出土遺物や形態から、近・現代に伐採された樹木を除去した後の抜き取り跡の可能性が考えられる。



## V 堀切古墳群出土土器の蛍光X線分析

### 1. はじめに

火成岩は大きく花崗岩類と玄武岩に分類される。これらの火成岩を構成する鉱物(造岩鉱物)の6割を占めるのが長石類である。長石類の中でもとくに、カリ長石(Kを含む)と斜長石(Caを含む)は逆相関の関係をもって火成岩類に含まれていることが分かっている。火成岩の風化の過程で長石類は破壊され、K、Caは溶出するが、残留鉱物としてその微粒子は粘土中にも残存していることがX線回折でも確かめられている。

全国各地の窯跡出土須恵器の分析データを見る限り、窯跡出土須恵器の素材となる粘土は窯跡の後背地を構成する岩石(火成岩)が風化され、粘土化された残留粘土であると考えられている。したがって、風化生成物とはいえ、その化学特性は母岩の化学特性の影響を直接受けていると考えられている。

全国の花崗岩類約3,000点の分析結果から、花崗岩類の化学特性は長石類が支配しており、とりわけ、カリ長石(K、Rbを含む)と斜長石(CaとSrを含む)が重要である。K-Ca、Rb-Srの両分布図上で逆相関の関係をもって分布することが実験データで出されている。したがって、各地の窯跡出土須恵器の化学特性もK-Ca、Rb-Srの両分布図上で表される。このことはすでに、各地の窯跡出土須恵器の分析データでも実証されている。したがって、岩石や窯跡出土須恵器の化学特性を求める上には、K、Ca、Rb、Srの4元素はきわめて重要である。蛍光X線分析はケイ酸塩試料を簡単に分析できるだけではなく、これら4元素をセットにして、同時に測定できることが岩石や土器の地域差を求める研究を進める上で有効であったのである。このことは意外に知られていない事実である。

粘土すなわち、土器にみられる地域差は岩石ほど大きくはないので、K-Ca、Rb-Srの両分布図上でも、試料集団は部分的に重複して分布する場合が多い。そこで、窯間の相互識別をするためには、複数の元素を測定して、2群間判別分析法という統計学的手法の導入が必要である。そして、2群間判別図は古墳などの消費地遺跡出土須恵器の産地推定に活用される。

本報告では、地元、京田辺市にある窯跡出土須恵器と陶邑産須恵器の相互識別を蛍光X線分析法で検討するとともに、堀切古墳群から出土した須恵器の産地を推定した結果について報告する。

### 2. 分析方法

須恵器小片は表面をタングステンカーバイド製の刃をもつ手動式研磨機で表面を研磨し、表面付着物を除去したのち、タングステンカーバイド製乳鉢の中で100メッシュ以下に粉砕された。粉末試料は塩化ビニル製リングを枠にして、10トンの高圧をかけてプレスし、内径20mm、厚さ5mmの錠剤試料を作成し、蛍光X線分析を行った。

蛍光X線分析には大阪大谷大学博物館に設置されている理学電機製RIX2100(波長分散型)

を使用した。使用X線管球はRh管球であり、使用条件は50kV、50mAである。この装置にはTAP、Ge、LiFの3枚の分光結晶が装填されており、軽元素の蛍光X線の測定にはガスフロー比例計数管を、また、中重元素の蛍光X線の測定にはシンチレーションカウンターを使用した。また、この装置には50試料が同時に搭載できる自動試料交換機が連結されており、コンピューターの制御で完全自動分析ができる分析装置である。常時、岩石標準試料JG-1中の6元素(Na、K、Ca、Fe、Rb、Sr)の蛍光X線強度が測定されており、装置自身の安定性がチェックされている。

定量分析のための標準試料としては、JG-1(群馬県産花崗岩類)を使用した。分析値はJG-1の各元素の蛍光X線強度をつかって標準化した値で表示した。

### 3. 分析結果

はじめに、地元、京田辺市の窯跡出土須恵器の分析データから説明する。表5には、分析点数は少ないが、まむし谷窯、新宗谷窯、興戸宮ノ前窯の3基の窯跡出土須恵器の分析値をまとめてある。この結果にもとづいて作成した両分布図を第43図に示す。これらの試料を包含するようにして、京田辺領域を描いてある。また、比較対照のために、陶邑領域も描いてある。K-Ca分布図では陶邑産須恵器に比べて、京田辺市の窯跡出土須恵器にはK、Ca量がやや多く、陶邑領域の右上に分布し、相互識別の可能性を示している。そこで、2群間判別分析法をつかって、京田辺群と陶邑群間の相互識別を試みた。その結果を第44図に示す。両軸にとったD2(陶邑)、D2(京田辺)はそれぞれ、陶邑群、京田辺群の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値であり、K、Ca、Rb、Srの4因子を使って計算された。測定された全試料について、陶邑群と京田辺群の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値を計算した。その結果をプロットしたのが第44図である。両群の試料集団はほぼ完全に分離しており、その相互識別は十分可能であることがわかる。

5%危険率をかけたホテリングのT2検定に合格する条件はD2(母集団)<10である。第44図をみると、陶邑群の殆どの試料はD2(陶邑)<10の領域に分布しており、また、京田辺群のすべての試料もD2(京田辺)<10の領域に分布していることが分かる。これが両母集団に帰属するための必要条件である。そのため、D2(母集団)=10のところを線を引きである。一方、第43図から、両母集団の試料は互いに、相手群の重心から一定の距離の範囲内に分布することが分かる。この事実から、互いに、相手群の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値をつかって、経験的に十分条件も求めることができる。第44図より、陶邑群にとっての十分条件はD2(京田辺)=7-300であり、京田辺群にとっての十分条件はD2(陶邑)=3-30であることが分かる。この結果、陶邑領域はD2(陶邑)<10、D2(京田辺)=7-300であり、京田辺領域はD2(京田辺)<10、D2(陶邑)=3-30であることが分かる。したがって、もし、京田辺市内の古墳出土須恵器が地元産であれば、京田辺領域に分布するはずであるし、陶邑からの搬入品であれば、陶邑領域に分布するはずである。

つぎに、京田辺市の堀切古墳群から出土した須恵器の分析データは表6にまとめられている。この結果にもとづいて、作成された両分布図を第45図に示す。殆どの試料は京田辺領域をずれて分布しており、地元産の須恵器が殆どないことがわかる。そこで、これらの試料の分析値(K, Ca, Rb, Sr)をつかって、両群の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値を計算した。その結果をプロットしたのが第46図である。殆どの試料は陶邑領域に分布し、陶邑からの搬入品であることを示している。No.34の試料のみが、第46図に示すように、京田辺領域の端近くに分布しており、京田辺産のようにみえるが、この1点だけが京田辺領域に分布するところから、果たして、京田辺産かどうかは疑問をもっておく必要がある。土器型式の再検討が必要である。No.35の試料はCa量が異常に多く、第45図でも、古墳出土の他の須恵器試料群とは遠く離れて分布した。第46図でも、図外にはみ出して分布した。産地不明とするしかない。通常、土器類ではCaはSrと正の相関性をもつ。花崗岩類中のCaとSrも同様の関係をもつ。第45図をみると、No.35の試料にはCa量が異常に多いことがわかる。試料採取のさい、または、試料処理の段階でCaの汚染があった可能性もある。

以上の結果、堀切古墳群の須恵器は殆どは陶邑産であった。地元産と確認できる試料は1点もなかった。堀切古墳群の築造時期と同じ時期に、地元、京田辺市には須恵器の窯跡がなかった可能性がある。今後の検討が必要である。

#### 4 最後に

軟質土器の分析結果について触れておく。分析値は表6に須恵器と一緒に記載してある。第45図にも須恵器と一緒にプロットしてある。須恵器集団とは離れて分布しており、胎土は異なる。このことは素材粘土も異なることを意味する。当然、別場所で作られたものであるが、比較対照とするデータがなく、産地不明とするしかない。一般的に、土師器には須恵器に比べて、Caが多い。斜長石を多く含むものと推察される。これは全国的な傾向で、斜長石は比較的低温で融解するため、Caを多く含む粘土は須恵器のように高温では焼結することはできない。その典型的な例が生駒山西麓産の軟質土器群である。生駒山西麓遺跡群から出土する軟質土器は例外なく、Caが異常に多い。このように、Caが異常に多い粘土は高温では焼結できないのである。したがって、硬いやきものは作れないのである。これが生駒山西麓では縄文時代以降、中世にいたるまで長期間にわたって、縄文土器、弥生土器、土師器などの軟質土器は製作したにも関わらず、須恵器を生産した窯跡は1基も発見されていない理由である。

他方、2点の埴輪も第45図の両分布図にプロットしてある。両分布図で比較的近接して分布するばかりではなく、表6より、Fe因子やNa因子でも類似しているところから、同じところで製作された埴輪と推察される。ただし、これも、比較対照の試料がなく、その産地は不明である。Fe量が異常に多いところから、製品を赤くするため、Fe量の異常に多い粘土を意識的に選択した可能性がある。

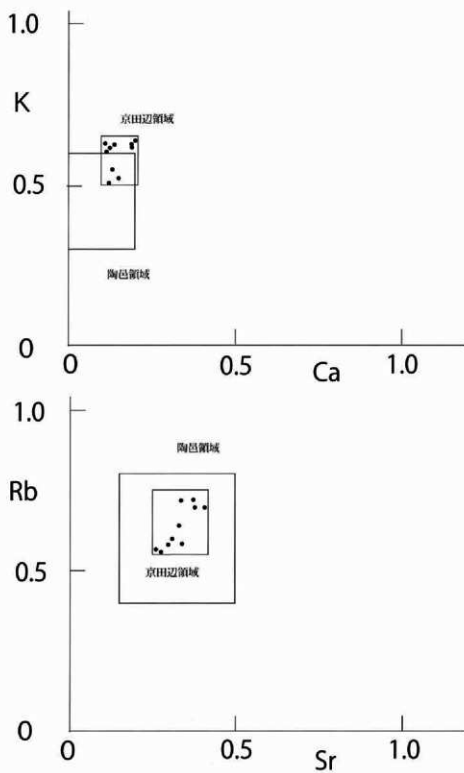
(大阪大谷大学 三辻利一)

表5 京田辺市窯跡出土須恵器の分析データ

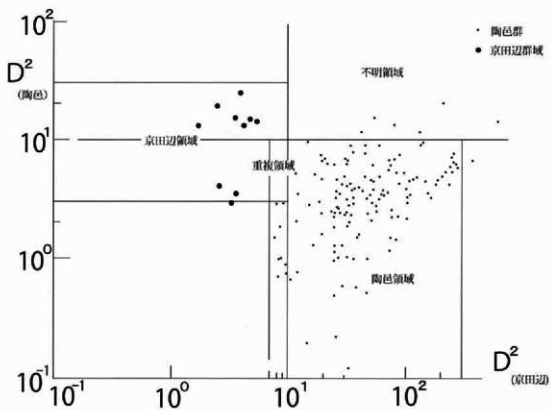
No	窯名称	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	備考
1	まむし谷窯	0.513	0.122	2.17	0.584	0.301	0.161	
2	"	0.636	0.200	1.63	0.700	0.408	0.274	
3	"	0.634	0.190	1.65	0.719	0.375	0.244	
4	新宗谷窯	0.549	0.133	1.52	0.641	0.327	0.223	
5	"	0.625	0.190	1.78	0.701	0.383	0.274	
6	"	0.524	0.154	1.78	0.586	0.343	0.186	
7	興戸宮ノ前窯	0.630	0.140	2.70	0.723	0.326	0.231	
8	"	0.608	0.115	3.20	0.560	0.275	0.207	
9	"	0.629	0.110	3.10	0.571	0.262	0.190	
10	"	0.615	0.124	2.48	0.599	0.312	0.177	

表6 堀切古墳群出土須恵器・土師器・埴輪の分析データ

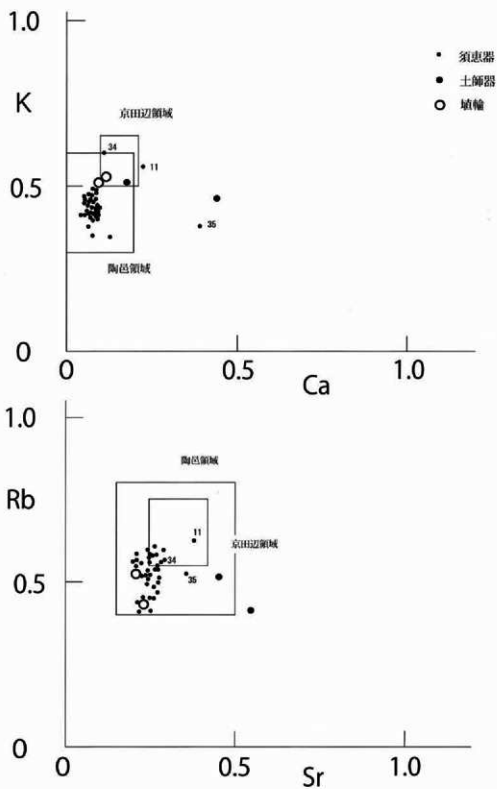
No	古墳番号	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	D2(陶器)	D2(京田辺)	推定産地
1	11号墳	須恵器	0.411	0.066	1.54	0.519	0.228	0.092	1.1	21.9	陶器
2	11号墳	須恵器	0.417	0.068	1.60	0.543	0.273	0.092	1.2	26.2	陶器
3	11号墳	須恵器	0.435	0.080	2.07	0.453	0.262	0.099	2.2	14.5	陶器
4	11号墳	須恵器	0.397	0.075	1.82	0.536	0.241	0.129	1.1	25.3	陶器
5	11号墳	須恵器	0.416	0.042	1.70	0.559	0.196	0.105	2.0	35.8	陶器
6	11号墳	須恵器	0.464	0.085	1.79	0.582	0.275	0.161	0.63	13.3	陶器
7	11号墳	須恵器	0.349	0.073	1.74	0.414	0.217	0.092	3.7	40.1	陶器
8	11号墳	須恵器	0.383	0.061	1.86	0.520	0.228	0.132	1.6	27.7	陶器
9	11号墳	須恵器	0.452	0.048	1.72	0.589	0.212	0.110	2.4	28.3	陶器
10	11号墳	須恵器	0.423	0.068	1.69	0.536	0.209	0.122	1.7	34.8	陶器
11	11号墳	須恵器	0.566	0.223	1.93	0.626	0.379	0.323	14.7	41.6	不明
12	11号墳	須恵器	0.466	0.070	1.53	0.496	0.277	0.111	2.4	27.1	陶器
13	11号墳	須恵器	0.430	0.062	1.84	0.420	0.243	0.099	3.9	19.1	陶器
14	11号墳	須恵器	0.443	0.069	1.68	0.548	0.208	0.126	2.4	33.1	陶器
15	11号墳	須恵器	0.476	0.068	1.85	0.590	0.250	0.147	1.8	16.5	陶器
16	11号墳	須恵器	0.478	0.070	1.87	0.586	0.254	0.163	1.8	15.4	陶器
17	11号墳	須恵器	0.461	0.084	1.81	0.563	0.232	0.170	2.3	23.6	陶器
18	11号墳	須恵器	0.438	0.085	1.74	0.523	0.248	0.159	1.1	15.0	陶器
-	11号墳	土師器	0.467	0.438	1.59	0.415	0.547	0.277	-	-	-
-	11号墳	土師器	0.512	0.185	1.48	0.524	0.453	0.199	-	-	-
19	1号墳	須恵器高杯	0.492	0.081	2.35	0.582	0.273	0.246	1.8	12.6	陶器
20	1号墳	須恵器高杯	0.446	0.056	2.13	0.565	0.210	0.103	2.1	26.4	陶器
21	1号墳	須恵器高杯	0.454	0.063	1.64	0.614	0.264	0.096	1.4	29.3	陶器
22	1号墳	須恵器高杯	0.489	0.079	2.34	0.554	0.273	0.242	2.0	13.2	陶器
23	1号墳	須恵器高杯	0.494	0.079	2.32	0.540	0.267	0.234	2.8	10.4	陶器
24	1号墳	須恵器高杯	0.497	0.078	2.30	0.556	0.281	0.240	2.4	18.8	陶器
25	1号墳	須恵器高杯	0.455	0.048	1.56	0.578	0.252	0.112	2.2	34.1	陶器
26	1号墳	須恵器高杯	0.466	0.045	1.46	0.561	0.252	0.114	2.9	36.5	陶器
27	1号墳	須恵器	0.430	0.084	1.79	0.513	0.254	0.107	0.89	13.8	陶器
28	1号墳	須恵器	0.419	0.080	1.84	0.509	0.245	0.105	0.97	17.1	陶器
29	1号墳	須恵器	0.435	0.087	1.79	0.514	0.275	0.112	0.64	12.8	陶器
30	1号墳	須恵器	0.427	0.084	1.80	0.513	0.250	0.111	0.95	15.4	陶器
31	1号墳	須恵器	0.413	0.081	1.77	0.477	0.255	0.111	1.3	15.1	陶器
32	1号墳	須恵器	0.401	0.091	2.19	0.453	0.234	0.125	2.5	31.8	陶器
33	1号墳	須恵器	0.351	0.127	1.74	0.600	0.292	0.102	7.7	57.9	陶器
-	7号墳	埴輪	0.534	0.108	4.75	0.524	0.208	0.165	-	-	-
-	7号墳	埴輪	0.520	0.099	4.55	0.444	0.216	0.167	-	-	-
34	1号墳	須恵器	0.601	0.106	3.21	0.561	0.293	0.189	14.4	8.7	京田辺?
35	1号墳	須恵器	0.382	0.393	3.38	0.532	0.351	0.227	109	127.0	不明
36	1号墳	須恵器	0.416	0.080	1.82	0.496	0.238	0.145	1.2	19.6	陶器
37	1号墳	須恵器	0.420	0.069	1.97	0.468	0.271	0.112	2.0	25.4	陶器



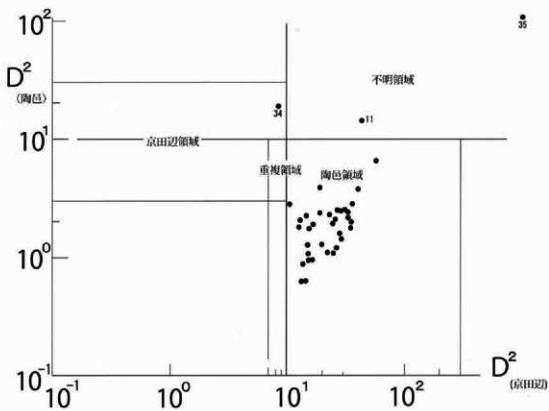
第43図 京田辺産群須恵器の両分布図



第44図 陶邑群と京田辺群の相互識別表 (K, Ca, Rb, Sr)



第45図 堀切古墳群出土須恵器の两分布図



第46図 堀切古墳群出土須恵器の産地推定表 (K、Ca、Rb、Sr)



## VI まとめ

### 1. 古墳の評価

羨道および羨門前排水溝から出土した須恵器の型式を基準にすると、堀切11号墳の築造時期は、大阪南部陶器窯跡群中村浩編年のⅡ-4からⅡ-6段階に併行する<sup>6)</sup>。その開始時期と考えられるⅡ-4段階は、かつて田辺昭三が『日本書紀』崇峻天皇元年(588)蘇我馬子が日本最初の本格的な寺院である飛鳥寺建立に着手した記載から、その下層出土中最も新しい一群に相当するとみる見解を提示し、6世紀第4四半期のものと考えた<sup>7)</sup>。しかしながら資料的に少なく、良好なものはいえなかった。その後白石太一郎は、藤ノ木古墳の被葬者を用明天皇没後、587年に皇位継承を巡って穴穗皇子と宅部皇子が蘇我氏に殺された事件から、この2人の皇子を比定した<sup>8)</sup>。そして同古墳から出土した須恵器がやはりこの型式に相当することから、田辺の年代観を再評価し、6世紀第4四半期が妥当であるとしたのである。その結果おおむねⅡ-4段階の相対年代はこの時期に想定されている。即ち、堀切11号墳の築造時期は、出土須恵器のなかに少ないながらも当該期の資料が含まれ、6世紀第4四半期に遡りうる可能性も否定しきれないと考えられる。加えて羨道幅がより広い規模で、使用石材も大きく立派であることから、1号墳より古相としての位置付けもできなくはない。しかしながらそれらが積極的に肯定される根拠として評価するには乏しく、本報告では可能性の範囲にとどめておく。

そして最終追葬時期は、Ⅱ-6段階の範囲で把握することが可能といえる。その年代観については、西弘海が提起した飛鳥編年案によると飛鳥Ⅰに相当する。しかしその後飛鳥地域からこの時期の資料の増加に伴い、細分され、修正されはじめている。その主要なものに、『聖徳法王帝説』裏書きに辛丑年(641)造営が開始されたと記された山田寺の整地層、並びにその下層から飛鳥Ⅰの新段階の資料が出土した。また乙巳の変(645)で焼亡した蘇我氏の邸宅跡の可能性が高い甘樞丘東麓遺跡の焼土層SX037から当該期の資料が出土している。このことから飛鳥Ⅰの新段階が7世紀中頃まで下がる可能性が出てきた。その結果、堀切11号墳の最終追葬時期が同時期ないしそれ以前とみなせる。ちなみに羨門前排水溝からまとまって出土した須恵器の多くはⅡ-5段階に併行する。この時期に関しては、年代を決定づける資料はないが、奈良泉馬見古墳群の牧野古墳出土のものが、同型式に相当することから7世紀初頭前後の年代観を想定する見解がある<sup>9)</sup>。また当該期に属する高杯に関しては上述したとおりさらに2小期に細分可能である。しかしながら今回の調査からは、この型式差が時間差として評価できるかどうかの判断材料を得られなかった。これについてはさらに検討課題として、今回の時期別編年では従来通りの同一型式の範囲で捉えることにし、一時期として扱った。なおこの溝から土師器高杯(23)が出土した。これはやや深い椀形を呈し、外側へ撥形に大きく開いた脚付の器形である。土師器としてあまり類例はないが、Ⅱ-6からⅢ-1段階に同形の須恵器高杯が認められる。加えてこれより小型のものは、枚方市平野山瓦窯第2次調査8号窯や甘樞丘東

館遺跡SX037、前期難波宮水利施設第7a層出土須恵器に類例がある。23は法量などからこれらより古相を呈していると考えられる。このうち前期難波宮水利施設第7a層出土資料は年輪年代で西暦634年伐採のヒノキ材を使用した木枠に関連するもので、当該期の絶対年代の一端を考える上で、補強する重要資料といえ注目すべきものといえる。

以上のことから堀切11号墳の埋葬時期は、追葬を含めておおよそ6世紀第4四半期に成立の可能性を含み、7世紀中頃までのほぼ半世紀に亘って及んでいたことがうかがえ、その間に少なくとも1回以上の追葬を含めて葬送がなされたと推定される。

## 2. 堀切古墳群の史的意義

以上述べたことから、11号墳は石室規模と構造から堀切古墳群中1号墳に匹敵するもので、南山城の木津川左岸の綴喜西部地域において重要な位置を占める横穴式石室墳と評価できる。この時期の群集墳が、丘陵南斜面を利用して、谷側に開口する型式が一般的に知られる。それ以前では丘陵頂部の尾根沿いに横穴式石室墳を構築する配置がみられ、堀切古墳群はこれらの形態と共通し、踏襲していると考えられる。

平成17年調査の報告の「9 まとめ」なかで④堀切古墳群の古墳の動向と築造順位と題して、考察した。その結果同古墳群の築造順位・動向は、

第Ⅰ期：西側支群の5号墳や7号墳など、埴輪を有する横穴式石室墳の築造を嚆矢として、古墳群の築造が開始される（6世紀前半）。

第Ⅱ期：第Ⅰ期から時期を隔てて、西側支群の4・9号墳、東側支群の1・11号墳が築造され、古墳群の最盛期を迎える。TK43～TK209型式期（6世紀後半～7世紀初頭）。第Ⅱ期末には、竜山石産凝灰岩組合式家形石棺を安置した6号横穴が築造される。

第Ⅲ期：古墳の築造が停止され、替わって横穴築造の最盛期を迎える。TK217型式期（7世紀前半）。

第Ⅳ期：横穴の築造が停止される。ただし10号横穴では銅製帯金具が出土するなど、一部8世紀代にかけても追葬が認められる（7世紀後半～8世紀）。

の4つの時期を想定した。今回の調査でもこのような古墳群の動向は、その築造順位に関しておおよそ同意できる。ただ今回明らかとなった新たな成果から堀切古墳群の築造過程を再評価すると、11号墳の築造時期が1号墳のそれより一型式遡る可能性があり、同時期ではないこと、第Ⅲ期の古墳群の築造が終了して、横穴築造の最盛期を迎えるが、このうち1・11号墳では石室内に追葬が繰り返されており、横穴式石室の使用と横穴築造が同時併行している事実が明らかとなった。これは単に築造が横穴式石室から新たな墓制としての横穴への転換という図式だけでは理解しきれないことといえよう。即ち堀切古墳群は、7世紀初頭の段階で、埋葬形式として横穴式石室墳と横穴が混在していたのであり、横穴式石室墳と横穴の存続形態の推移を具体的にたどれる希有な例といえよう。このことが同古墳群の大きな特徴ともいえる。

次に石室の特徴を周辺地域の古墳と比較すると11号墳の石室は、1号墳同様全長9mを越

える大型で、綴喜西部には例がなく、木津川右岸の城陽市黒土1号墳、同市上大谷17号墳、木津川市前樽2号墳、同市井出塚古墳などが知られるにすぎず、南山城屈指の規模を有した古墳といえる。加えて石室内の埋葬形態が二上山白石凝灰岩製組合式石棺を採用していることは、山城地域においてⅡ-3段階の6世紀後半に想定される乙訓地域最大規模の横穴式石室を有する大型前方後円墳の物集女車塚古墳、Ⅱ-5段階の7世紀初頭前後の嵯峨野の音戸山5号墳、堀切古墳群とほぼ同時期並行する前方後円墳ないしは円墳の可能性のある今里大塚古墳など各地の古墳群で中心的な位置を占める古墳にみられ、これら同様、地域内で中心的な役割を担った首長層の墳墓であったと考えられる。このような極めて特色のある石材を棺材としていることは、山城地域でもヤマト政権と密接な関係を保つ特定された階層であったことを物語っている。

また1号墳との利用状況を比較すると、1号墳より11号墳の築造が1時期先行することがほぼ明らかとなった。そして埋葬施設に二上山白色凝灰岩製家形石棺をほぼ同時期ないしは相前後して使用することから、当地域の有力首長層がヤマト政権との密接な関係を維持し続けていた証拠といえよう。加えて1号墳石室内から雲珠、轡、座金具、兵庫鎖などの馬具や刀子や鉄鏃などの武器、ガラス玉からなる豊富な副葬品を保有することから、他の被葬者集団と比較して、より上位の階層に属し、周辺一帯での中心的古墳であったことは、前回の報告ですでに指摘したとおりである。11号墳では、石室内が石材抜き取りの際に破壊を受けていることから、副葬品の状況を知る手がかりをもちえないが、羨門前排水溝から僅かに飾金具の一部が出土している。このことから同古墳でも一程度程度の副葬品を備えていたと類推でき、かつ石棺の使用や石室規模から想定して、11号墳でも1号墳同様豊富な副葬品を保持していた可能性もある。

一方近年、山城地域における横穴の位置付けに関する研究が進捗しつつある。そのなかで横穴式石室と横穴の関連について、閉塞・開口作法・儀礼に共通性がみられる反面、墳丘の有無・墓室の形状が異なることは、中央政権が何らかの関与した痕跡がうかがわれ、横穴式石室と横穴を後期群集墳として同列に捉えることが了解される見解が出されている<sup>10)</sup>。そのうえで“後期古墳秩序”のなかで“墳丘のない古墳”という性格付けをし、「大化薄葬令から…(中略)…墳丘のない墳墓を含めて、墳墓の序列が定められているのである。そして“墳丘のない墳墓は、墳丘のある墳墓に対して下位にランクされる”という社会通念があったことがうかがえる点を強調したい。また逆に横穴式石室の下位に横穴がランクされていたという事実・記憶があったがゆえに、そのような規定がなされたとも考えられる。」と指摘している。

堀切横穴群については、西側支群に密集する傾向にあり、しかも丘陵東斜面の中位に尾根稜線上に並行して開口部を東、木津川方向に向け主軸を揃えている。5・6号横穴が南に少し離れている以外横穴は近接し、ほぼ等間隔に築造されるという共通性が認められる。このようなあり方は八幡市女谷・荒坂横穴群でも共通する。その報告のなかで横穴の配置に関して、最初の段階で、数基の横穴を順次造っていくための範囲を分割し、埋葬主体者と集団間で、それを相互に承認し合う関係があったことを想定している。この所見に対して、堀切古墳群の横穴に

も適応できるものと考えられる。ここで出土遺物からその順位を想定してみる。

まず9号墳東脇の6号横穴が横穴群の最も南、丘陵尾根の最深部に最初築造される。出土須恵器の型式から、6号横穴の方が9号墳より古相を示すことから、先行すると考えられる。即ち同古墳群の第Ⅱ期、Ⅱ-5段階のなかでも横穴の方が先に造墓されたことになる。しかも埋葬主体には兵庫県加古川流域の竜山石製家形石棺を採用し、玄室内に木炭敷の上に礫を敷き詰めた床を造っていることや、副葬品に金環、刀子などがみられることから厚葬をおこなっている。1号・11号横穴式石室の二上山白色凝灰岩製家形石棺と比較すると、被葬者に階層差がみられる。それは古墳時代中期、4世紀後半から5世紀中頃にかけて畿内の重要な大型古墳の棺に、共通して兵庫県加古川流域で産出する「竜山石」で作った長持形石棺が使われ、その周辺には舟形石棺が分布する状況と類似する。すなわち前者の使用はヤマト政権中枢あるいはそれと密接に関係があった地域で、後者の分布はそこから一步離れた政治的立場を示す地域であると指摘されている。山城をはじめとする近畿の横穴式石室の主要な埋葬主体に採用される竜山石製家形石棺が認められることは、これらの横穴式石室墳に次ぐものといえる。このことは横穴にも該当することを物語っており、墳丘規模や埋葬主体の差が、一程度身分格差と符号することを示唆するものといえる。ただし前方後円墳を理解する上で、古墳の大きさが権力の大きさを示すものではないという見解も一方で提示されている<sup>11)</sup>。

ついで5号横穴が6号横穴の北に、9号横穴が密集部の南寄りに築造される。5号が直葬であるのに対し、9号では置き土や敷石などは舗設されず、棺台上に木棺を据える方法をとる、埋葬形式に格差がみられる。両方とも副葬品には須恵器だけであることにも注意する必要がある。この9号が密集部での範囲を確定する際最初の基準となった位置を示すものと考えられる。この時期がⅡ-5からⅡ-6の段階に想定できる。この後10号横穴が9号に接して南側に築造され、9号同様の埋葬形式をとる。ここからは銅製帯金具が出土し7世紀後半以降追葬がおこなわれたことがうかがえる。そして最後となるⅢ-1段階<sup>12)</sup>に8号が9号の北に接して築造され、9号同様の埋葬形式をとる。ここでも副葬品は須恵器だけに限られる。このようにみると、横穴密集部での7号から10号の埋葬形式はすべて共通していることが明らかであり、それ以外は格差が認められ、異なる。しかしながら堀切古墳群では、時期を経るとともに、身分格差にかかわらず総体として埋葬形態や副葬品は簡素化をたどっていく。

以上のことから横穴が最初に築造されるⅡ-5段階では、横穴式石室とは被葬者の階層差を反映した形態を採用するが、次の段階では横穴相互にも序列が顕在化ようになる。ただし密集部の範囲内で同一埋葬形式が時期を経ても維持し続けたことは、その場所に継続して埋葬されていった被葬者達の身分に変化がなかったことを物語っている。それが一つの堀切横穴群における家族の身分秩序の継承を意味し、その人々は整備された支配構造の管理下に絶えず置かれていた結果と推測できる。そして横穴築造の終末は、横穴式石室の追葬が終わるとほぼ同時期ないし相前後する時期を想定することができよう。即ち堀切古墳群では、横穴式石室利

用と横穴築造の最終段階がほぼ一致するという事は、単なる偶然ではなく、ヤマト政権の政治システムの再構築に向けた新たな統治機構の整備と連動したものと解釈できる。

以上のことを踏まえて堀切古墳群全体を立地環境から概観すると、東側支群、西側支群とは明らかに質的な差があったと考えられる。東側支群は、尾根最高位からやや下った稜線上に1号墳、その南の丘陵中に3号墳、1号墳南東約40mの支尾根上に11号墳が各々立地する。11号墳は1号墳より5mほどやや低位の位置に1号墳の軸線と揃えるように開口部を設けている。このことから立地上1号墳が優位といえる。これらは近接するのではなく、ある程度間隔を置いて多少左右にずれながら大体南北に配置される。ただし南半の1・11号墳だけは東西に隣接して併設されている。

これに対し西側支群では4・7・9号墳が尾根稜線上に南北に直線的に近接して立地し、そこから南方尾根稜線上の高位に5・6号墳が位置する。これまでの研究から、西側支群の築造過程は円筒埴輪と人物埴輪を配する6世紀前半の7号墳が、最初に築造される。次いで立地と床面標高から4号墳、9号墳と継続するが、5号横穴調査時に4号墳から遺棄されたと考えられる陶棺が出土することから、4号墳が後出することも考えられる。しかし出土須恵器の型式から分析すると、4号墳出土の須恵器は、1号墳のそれとほぼ同型式の可能性があることから、築造は1号墳と併行関係にあることも予想される。また9号墳出土の須恵器は、高杯蓋、高杯杯部がより小型化することから、4号墳より新相の型式であり、須恵器の型式編年から、やはり4号墳の築造が先行する蓋然性が高いといわざるを得ない。一方南側支群では、円筒埴輪を有する5号墳の築造が先行し、ついで6号墳と考えられている。

このような配列と築造順位は、西側支群の東に隣接して展開する横穴群でも、類似したあり方がみられる。

以上のことを踏まえ、改めて堀切古墳群の古墳の動向と築造順位については、以下のように整理できる。

第Ⅰ期：西側支群の5号墳や7号墳など、埴輪を有する横穴式石室墳の築造を嚆矢として、古墳群の築造が開始される（6世紀前半）。

第Ⅱ期：第Ⅰ期から時期を隔てて、西側支群の4・9号墳、東側支群の1・11号墳が築造され、古墳群の最盛期を迎えるⅡ-4～Ⅱ-6段階（6世紀後半～7世紀初頭）。

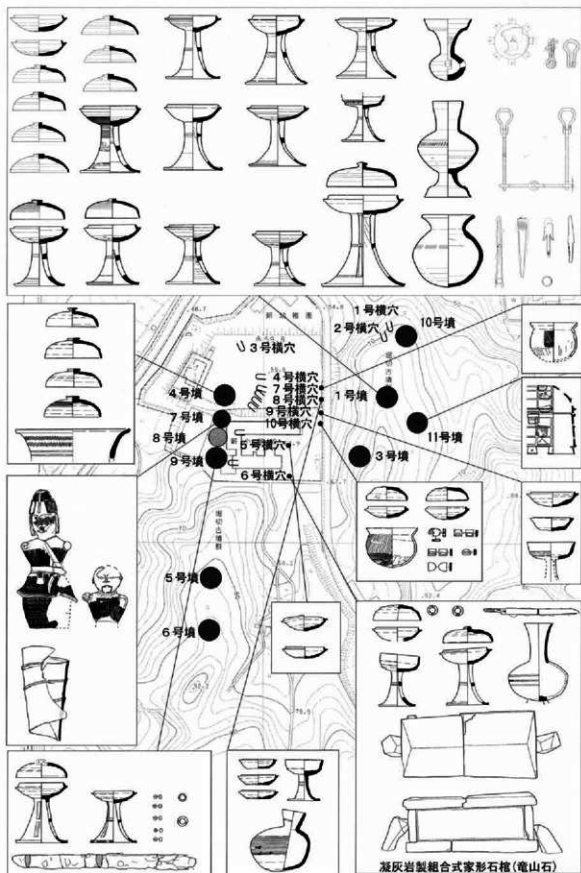
a小期：11号墳築造開始（限定付の可能性）

b小期：1号墳築造、11号墳築造ないし追葬

末期：西側支群の竜山石の組合式家形石棺を安置した6号横穴が先行し、9号墳がその後築造される。

第Ⅲ期：古墳の築造が停止され、1号・11号墳で継続して追葬。それとともに横穴築造の最盛期を迎える。Ⅱ-6～Ⅲ-1段階（7世紀前半）。

第Ⅳ期：横穴の築造が停止されるが、追葬は継続しておこなわれる。ただし10号横穴では



第47图 堀切古墳群・横穴群主要出土遺物

古墳	墳形	規模	内部構造	石室主軸	床面構造	石室全長	石室規模	埋葬槽・出土遺物等
1号墳	円墳	径22m	両袖式 横穴式石室	N24° W 南南東	玄室・羨道置土+石敷 玄室内石敷+円礫 石粗砂栗埴水溝	9.3m	玄室長4.6×奥壁幅1.37 玄室高(2.3) 羨道長4.7×幅1.1	埋葬槽・出土遺物等 組合式家形石棺(二上山白石) 馬具・装束武器・ガラス玉・須恵器 土師器・石棺に赤色顔料塗布
2号墳	自然地形							
3号墳	円墳		横穴式石室					伝甲冑・伝装束武器・伝須恵器等
4号墳	円墳	径20m	横穴式石室	N18° W 南南東	玄室内置土か		玄室幅(1.2)	鉄片・須恵器等
5号墳	円墳		横穴式石室					円筒埴輪・須恵器等
6号墳	円墳							
7号墳	円墳	径15m						
8号墳	円墳(円墳)	径(16)m						円筒埴輪・形象埴輪・須恵器器台等 周辺で須恵器出土
9号墳	円墳	径(20)m	両袖式? 横穴式石室	南西	玄室内置土+円礫 円礫に赤色顔料付着	5.2m以上	玄室長(3.5) 羨道長(1.7)	板状石材による組合式甬形石棺 鉄刀・ガラス玉・銅環・須恵器等
10号墳	円墳	径23m						
11号墳	円墳	22×19.2m	左片袖式 横穴式石室	N39° W 南東	玄室置土+石敷? 羨道石敷 石粗砂栗埴水溝	8.5m以上 (1号墳とはほぼ同規模か)	玄室幅(1.2) 羨道長3.5m以上×幅0.8	組合式家形石棺(二上山白石) 土師貫集甲形陶棺・断命具・須恵器 土師器
横穴	内部構造			開口方向	平面形態・床面構造	全長	玄室規模	埋葬槽・出土遺物等
1号横穴	横穴			北北西				伝須恵器
2号横穴	横穴			北北西				伝須恵器
3号横穴	横穴			北北西				伝須恵器・伝鉄刀1
4号横穴	横穴			東	平面とつくり	残存長2.96m	奥壁幅1.40、高1.54	直葬?・人骨1・須恵器・土師器
5号横穴	横穴			東	平面逆台形状	残存長4.6m	奥壁幅約2.0	直葬?・人骨1・須恵器・土師器
6号横穴	横穴			東	平面逆台形状 木敷板+円礫	残存長4.6m	奥壁幅2.6、高さ(2.1)	組合式家形石棺(龜山石)・人骨1 金環1対、刀子・須恵器・土師器
7号横穴	横穴			南東	平面とつくり?	残存長2.15m	奥壁幅1.65	棺台石有(木棺)・土師器
8号横穴	横穴			南東	平面とつくり	残存長2.8m	奥壁幅1.0	棺台石有(木棺)・須恵器
9号横穴	横穴			南東	平面とつくり	残存長4.2m	奥壁幅1.5	棺台石有(木棺)・須恵器
10号横穴	横穴			南東	隅丸長方形	残存長3.3m	奥壁幅1.65	棺台石有(木棺)・人骨2 赤色顔料の付着した石材有・鉄片 鉄釘・銅製帯金具・須恵器・土師器

単位はm、括弧内は推定

表7 堀古墳群・横穴群の諸要素一覧

銅製帯金具が出土するなど、一部8世紀代にかけても追葬が認められる(7世紀後半～8世紀)。

堀切古墳群全体としてこのような経緯をたどり、しかも異なる配置形態と埋葬方法を有した二つの支群からなり、それと併行する横穴群も同様な法則性をもって併存している。その時期は山城をはじめ畿内各地で新式の群集墳が盛行しつつある段階に相当する。そして2系統(横穴群を別に区分すると3系統)の序列を有する集団がほぼ一定期間に存続し得たことは、かなり整備された権力構造が全時期に渡って、ほぼ一貫した支配体制を維持し得たことと大いに関連すると考えられる。このような体制下にあつて群として集合している横穴式石室や横穴群でも、その形態と内容は多様な序列に基づく重層した家族間からなっていたことを、堀切古墳群から読み取れるであろう。



## Ⅶ 総括

山城地域の木津川左岸、綴喜西部は、京都府下でも有数の横穴群の密集地域であるとともに、早くから古墳や横穴に関する調査・研究がなされてきたことから、これらの古墳や横穴の築造の成立と変遷過程から、ヤマト王権との関わりについて注目を浴びてきた地域であり、研究も進捗していることは学会でもよく知られている。

堀切11号墳は、径22mの円墳で、横穴式石室を内部主体にしているが、埴輪、葺石などの外装施設は認められなかった。左片袖式の横穴式石室は、玄室が破壊されていたが、その掘形長は、最大に見積もって6mほどの規模になり、ほぼ1号墳の玄室掘形長6m(袖石幅を含む)と遜色なく、しかも玄室掘形幅も1号墳の基底幅約2.8mとほぼ近い規模であり、1号墳に匹敵する規模の玄室であった可能性が高い。埋葬された須恵器のうち最古の一群は、Ⅱ-4段階の範疇で捉えることが可能であり、おおむね6世紀後半の築造に予想可能である。

南山城において、これだけの石室規模を有する古墳は数少なく、当地域屈指の古墳であることが判明した。しかも堀切ウマノセ山塊群丘陵の尾根筋沿いに1号墳と東西方向に並列して、ほぼ相前後する時期に築造されたことは注目すべきことといえる。石室内には、玄室最奥部に陶棺が、羨門前排水溝と東墳丘裾部から二上山白石凝灰岩製家形石棺片と陶棺片が出土することから、追葬がおこなわれており、須恵器の型式から最大4時期にわたったことが想像できる。これらの埋葬主体の順序は、羨門前排水溝での出土状況を準拠すると、二上山白石凝灰岩製家形石棺が下層出土と古く、次いで土師器・須恵器などの副葬品、土師質亀甲形陶棺は上層出土と層的に前後関係がみられる。またこの出土のあり方は、まず石棺片、次いで副葬品、最後に陶棺片と石室内から羨道外に運び出された順序を表している。このように石室内からの搬出順を認識することは、玄室最奥部に陶棺片がまとまって出土し、最終段階での追葬されたことと矛盾なく、埋葬状況を裏付けていると考えられ、妥当といえる。そしてもう一つ考えられる埋葬主体として、木棺直葬を想定することも可能であるが、このことは今調査で考古学的な検証を得られず、推定の域を脱するものではない。それを視野に入れても埋葬主体として石棺が先行し、次いで陶棺が追葬されたことは動かしがたい事実といえ、かつ東側支群のなかで、二上山白石凝灰岩製家形石棺は1号墳と11号墳で、ほぼ同時期ないし極めて短期間内に相前後して継続して採用されたことになる。いずれにしても時間的間隔のズレはあるが、東側支群で継続して二上山白石凝灰岩製家形石棺が採用されたことは、堀切古墳群内の東側支群に埋葬された階層が同古墳群の中でも優位な位置を占めていたことは明らかであろう。このように東側支群で追葬が繰り返されている状況下において、西側支群では新たな墓制である横穴の築造が開始されていく。

そして横穴式石室と横穴での埋葬が併行している事実は、石室から横穴へという推移は単純な図式では計り知れないことを上述の「まとめ」のなかで検討した。ただ、6号横穴にみられ

る組合式家形石棺の石材として山城地域で一般的な竜山石の凝灰岩を使用していることは、東側支群の被葬者に次ぐ階層の横穴が西側支群に存在し、石棺の石材差は堀切古墳群を構成する集団内での階層差を反映していると考えられる。即ち堀切古墳群の被葬者達は、同一集団内で何らかのヒエラルヒーに基づいた階層からなる人々で構成された集団と考えられる。

このことは八幡市女谷・荒坂横穴群での複数の集落で一つの墓域を造成し、それを共同で利用して、家族ごとに造墓活動するという被葬者像とは少し異なっているように思われる。

出土遺物に関してまず注目されるものに、須恵器の器形模倣の土師器短脚高杯がある。上述された如く、この器形が確認される時期が極めて限定されることにその特徴を見いだせる。6世紀後半から7世紀における須恵器編年の基準として、その法量の差違が、時期差に連動していることが近年の研究から詳細に亘って検討されてきている。この成果に依拠すると、この土師器短脚高杯もそれを如実に反映していると考えられる。即ち法量から奈良県牧野古墳出土と極めて相似関係にあることから、ほぼ同時期ないしは相前後する時期を想定することが可能であろう。さらに平野山瓦窯や甘樫丘焼土層SX037出土、前期難波宮水利施設第7a層出土資料のものが、法量分布からみると11号墳や牧野古墳出土のものより小型化する傾向にあり、より後出した段階のものといえ、従来からの編年観を再評価するものといえる。即ち牧野古墳の築造がおおよそ7世紀初頭を相前後する時期に想定されることや前期難波宮水利施設第7a層出土資料は年輪年代で西暦634年伐採の木杣に関連するもので、7世紀前半以降の時期を充てることから、11号墳の追葬時期の年代の一端をうかがうことができる。

ついで出土遺物の生産地に関して、三辻利一氏の分析結果から、陶邑領域の範疇で収まること、須恵器の観察結果からは同一ないしは近接地からの供給であったことが指摘され、南山城木津川左岸、綴喜西部の主たる生産地のものでないことがいえ、陶邑を含む大阪南部古窯群からの搬入品の可能性を指摘できよう。このことは須恵器の編年で後出の型式である平野山瓦窯や卑上がり古窯などの小地域単位の生産が開始される体制が成立する直前の、南山城の須恵器供給の実態を示すものといえる。また、今回堀切7号横穴出土の埴輪の分析結果と、女谷・荒坂出土の埴輪の分析を総合すると、木津川沿岸地域での生産の可能性を指摘されている。埴輪についてはその成形、鈔の状態から東海系の可能性が高いが、胎土の特徴から搬入品ではなく在地産の可能性はあることは注目すべきことといえよう。即ち副葬品はヤマト政権下の影響を色濃く反映した大阪南部地域古窯産であるのに対し、古墳を飾る埴輪は、東海の影響を受けた在地産を使用していることに、南山城の在地首長層の社会的関係のあり方を微妙に反映した結果といえる。

堀切古墳群は、6世紀前半に当地域では、初めて横穴式石室をもつ古墳の造墓活動が開始し、築造されたものである。そして対岸の木津川右岸青山古墳群より南、前・中期の古墳が全く築かれなかった青谷川沿いには、61基ほどの横穴式石室を埋葬主体とする古墳群が築造される。しかもそれより北、宇治川北岸には、考古学から継体天皇陵に想定する高槻市今城塚古墳と全

く同形式のこの時期南山城最大規模を誇る前方後円墳宇治二子塚とそれに続く五ヶ庄北部から木幡にかけて南山城最大の群集墳である木幡古墳群が形成される。さらに桂川左岸の乙訓地域には物集女車塚古墳が築造される。この古墳は、古墳時代後期の大王権力がそれを支持した政治勢力に対して規格化された玄室空間の規模の差により身分的序列を表現した「畿内型」石室をもった山城有数の横穴式石室墳である。これらの特徴として、その各地域において、前・中期の古墳が確認されないこと、これらの古墳築造以後同様な墳丘規模を有する古墳がみあたらないことがまず指摘できる。次にその立地をみると、堀切古墳群は古山陽道と古山陰道の分岐地点付近、青谷川沿いの古墳群は、堀切古墳群の南、古代の山本駅で古山陽道・古山陰道から東に分かれて木津川を渡り、田原道に至る入り口に、宇治二子塚は巨椋池東岸の平坦地にあり、久津川古墳群を北上して、宇治川を挟んだ北岸の地に位置する。ここは山科盆地を経て北端の逢坂山を越えると近江につながる。また宇治川を遡り琵琶湖の南端勢多に行き着くと近江である。即ち二つの幹線の分岐点にあたり、近江は継体を擁立した有力首長の勢力基盤であった。そして北陸道を経ると継体の出身地とされる越前にたどり着くのである。一方青谷川沿いの古墳群は、堀切古墳群と木津川を挟んだ右岸の地に所在し、そこから田原道沿いに宇治田原を経るとやはり近江勢多に行き着く。そこから東南に鈴鹿峠を越えたのち東海道をたどると尾張・東海へとつながる。物集女車塚古墳は古山陰道が丹波に抜ける入り口に位置し、山陰と山城を結ぶ交通路の要衝、結節点にあたることである。即ちこの時期、ヤマト政権を起点とした新たな路整備の一環として、南山城の北端と桂川右岸域は古墳と交通路により新たな一つのネットワークが形成されたと考えられる。即ち堀切古墳群は、そのなかでも主要幹線道の重要な結節点であり、交通の要衝の地に位置していたのである。

さらに石室構造や埴輪に関してみると、これらの古墳や黒土1号墳、畑山2号墳、郷土塚4号墳の横穴式石室の平面形に胴張り傾向がみられること<sup>13)</sup>、使用された円筒埴輪に尾張系埴輪の形態的特徴の要素がみられること<sup>14)</sup>など、そこには近江、越前、美濃から東海へと技術の伝播を含めた密接な強い結び付きが想像される。とりわけ古墳時代後期に、畿西西部、木津川左岸京田辺市新地区に密に分布する傾向は、上述した交通の要衝だけでなくとどまらず、極めて政治的色彩を反映した結果と考えられる。

このように6世紀前半以降南山城および桂川右岸域において、前代まで造墓活動がおこなわれなかった地域における交通の結節点に新たな型式の埋葬主体である横穴式石室を採用した古墳が出現したことは、北陸の古墳動向の第4段階、古墳時代後期前葉から中葉にかけての時期、年代的には5世紀後葉から6世紀前半に相当する。そして前段階で前方後円墳がつくられていた地域とは別のところで、新しく中小規模の前方後円墳がつくられるようになる状況がこの段階でみられると指摘している<sup>15)</sup>。さらにこのような動向は全国的な状況として進行している現象とみられ、新たにつくられた古墳も一代もしくは長く二代で途絶えてしまい、次には続かないことも特徴といえる。このような動きに連動して横穴式石室を内蔵する小円墳の集合、

即ち新式群集墳の盛行という事態がこの時期以降顕在化してくる。このことは堀切古墳群においても同様な現象として捉えることができよう。

いふならばその背景として、『日本書紀』や『古事記』にみられる継体朝の成立に伴う王権体制の構築に連動し、その一翼を担った地域首長層の政治動向の表象といえる。しかも東海や越前、近江の有力首長層がその継体擁立を巡って大きな背景になっていたことがこれまでの文献史による研究から明らかになっている。『新日本紀』に引く聖徳太子の伝記の一つである『上宮記』から推定される継体天皇の系譜のなかで、母の振姫(布利比弥命)は垂仁天皇七世孫とされ、継体擁立に関して極めて重要な役割を演じたとされる北陸・近江・尾張や東国の氏族のなかに、この垂仁天皇の皇子を始祖とする例が数多く見られることにも関係することが予想される<sup>16)</sup>。そして継体天皇は近畿に入って以降、河内国の北部樟葉宮で即位したのち、山城の筒城(綴喜)宮、弟国(乙訓)宮を20年にも渡り転じた後、ようやくヤマト政権のあった南大和磐余宮に向かう。その理由として『日本書紀』にみえる武埴安彦・吾田媛、麻坂王・忍熊王の2つの反乱伝承である。その戦いの舞台となったのが輪韓河、挑河(今の泉河で、木津川が湾曲して北流するあたり)、羽振苑という地点、今の祝園、伽和羅(現在の八幡市八幡)、屎禰、今の樟葉である<sup>17)</sup>。このように木津川左岸の南山城地域に展開した争乱のあった場所は、つぎの継体天皇がヤマト政権に入る前段階の宮の位置と一致していることは偶然とは思われない。しかもそこには前述した古墳群や横穴が造営される。このような築造動向の大きな変化について、継体朝以降のヤマト政権の構成主体や政治変動に歴史的に関連している可能性は既に指摘されたことである<sup>18)</sup>。6世紀前半は、南山城において活発な群集墳や横穴を含む古墳築造が新たな区域で活発に始まった時期と軌を一にする。その史的特質を表象するひとつに堀切古墳群の存在があると考えられる。くわえて横穴式石室に追葬という葬送とそれに伴う儀礼が依然残存し、継続している段階に横穴の築造がおこなわれることは、地域における首長層と有力農民層の緊張した状況を呈していると予想できる。即ちヤマト政権にとって地域首長層を完全にその支配下に組み入れられなかったことを暗に物語っていると考えられる。そして新たに有力農民層を新たな墓制としての横穴築造を承認したことは、ヤマト政権にとって一元的支配構造を確立していくための政治的手段であった。しかしながら急展開するまでに至らず、地域首長層の葬送儀礼を追葬という形態で温存せざるを得なかったヤマト政権の脆弱さを示すものといえる。

このような状況を理解する上で、手がかりとなる重要な視点として古墳時代後期小規模な円墳や方墳が複数まとまって群をなし、それを「後期群集墳」と呼称する古墳群がある。その形成された背景に生産力の進展に伴い有力農民層が台頭し、その勢力が増大するなかで「中央政権にとっては、次々と生まれてくるこうした新興勢力を取り込むために、彼等に古墳築造を認めることによって、身分秩序のなかに組み込むという『政策』をとる必要があった」<sup>19)</sup>と認識されている。それを踏まえて岩松は「横穴式石室墳と較べて横穴の分布範囲が限られている点を鑑み、墳丘のない古墳である横穴は、横穴式石室墳よりも特殊な古墳であったのであろう。



第48図 南山城における後期古墳分布図

横穴式石室墳が、地方の氏族を介しての築造の承認だとすると、横穴は中央政権が直接的に関与した墓であったと考えられまいか。直接的に中央政権が地方支配に乗り出す必要があった場合に、地方氏族に対抗して、その地の有力農民層に横穴の築造を認めたものであろう。横穴式石室墳よりも新しく出現することは、地方氏族の地方支配の過程と中央政権がそれを切り崩す時期のズレが表れているのであろう。また中央政権と直接結びついているため、特別な副葬品を有する横穴も散見されるのであろう」と位置付けた<sup>20)</sup>。

このような視点に立つならば、堀切古墳群での横穴式石室における追葬と横穴築造が併行する背景が理解できる。こうした状況を克服するまでにはもう少し時間を要するが、同古墳群はヤマト政権、地域首長層、有力農民層という三重構造から脱却してはじめて、古代国家成立の前夜へと推移していく過程を詳細にたどれる可能性をもった極めて示唆に富む遺跡であることに異論はないであろう。

本報告で扱った堀切11号墳をはじめとする堀切古墳群は、継体朝という新たな政治的枠組みに関与し、その支持勢力となった地域首長層の墳墓であるという推定の上で検討してきた。これらの古墳群や横穴の具体的な内容や果たした役割に関しては、堀切古墳群だけでなく周辺一帯のさらなる調査と、須恵器や埴輪を含めた出土遺物の生産地および、その流通の様相を解明していく科学的分析を含めた作業が必須の課題であり、本報告がそのための検討の一助に供することができれば、幸いである。そして本調査成果がこのことを進捗する材料として、かつ律令国家成立前夜のヤマト政権周辺地域の実態がより一層明らかにしていく今後の研究の手がかりに役立つことを期待する次第である。

## 【註】

- 註1 杉原和雄「昭和57年における埋蔵文化財の発掘調査」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会 1983
- 註2 奥村清一郎「南山城の横穴」『京都考古』第27号 京都考古刊行会 1982
- 註3 平良泰久「南山城の後期古墳と氏族」『京都考古』第14号 京都考古刊行会 1975
- 註4 平良泰久「木津の古墳時代」『木津町史 本文編』木津町 1991、同「精華の古墳時代」『精華町史 本文編』精華町 1996
- 註5 高橋美久二「堀切古墳と古墳の時代」『新誌』新誌刊行委員会 1991
- 註6 中村浩「和泉陶器窯の研究」柏書房1981、以下Ⅱ-4からⅡ-6段階表記に関して、特に断りのない限り中村編年に依拠する。
- 註7 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981
- 註8 白石太一郎「古代史のなかの藤ノ木古墳」『藤ノ木古墳』日本の古代遺跡を掘る5 読売新聞社 1995
- 註9 白石太一郎「畿内における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集 国立歴史民俗博物館 1982
- 註10 岩松保「第7章南山城地域の横穴と卑人、その被葬者を巡って」『南山城地域における文化的景観の形成過程と保全に関する研究』平成18年度京都府立大学地域貢献特別研究成果報告書 2007
- 註11 水野正好「天皇陵と埴輪」高槻市教育委員会編『継体天皇と今城塚古墳』吉川弘文館 1997
- 註12 7世紀中頃を相前後する孝徳朝前期難波宮出土資料に類似、『大阪城址Ⅲ』（財）大阪府文化財センター 2006、福岡澄男「孝徳朝の土器」都城制研究会発表資料 2008
- 註13 内田真雄「山城の横穴式石室」『近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会 2007
- 註14 梅本康広「淀川流域の東海系埴輪とその製作動向」『埴輪論叢』第6号 埴輪検討会 2007
- 註15 和田晴吾「越前・近江からみた継体大王」宇治市教育委員会編『継体王朝の謎』河出書房新社 1995
- 註16 和田萃「古代史からみた継体大王」宇治市教育委員会編『継体王朝の謎』河出書房新社 1995
- 註17 門脇隆二「古代王権と今城塚古墳—継体大王と三嶋の地」高槻市教育委員会編『継体天皇と今城塚古墳』吉川弘文館 1997
- なお、同書では、伽羅羅について「現在の田辺町川原」とある。長らくそのように考えられてきたが、八幡市正法寺文書の調査により現在では八幡市八幡付近とされている。
- 註18 都出比呂志「古墳時代中朝系譜の連続と断絶」『待兼山論叢』第22号史学篇 大阪大学文学部 1988
- 註19 福永伸成「共同墓地」『古代史復元 古墳時代の王と民衆』6 講談社 1989
- 註20 註10に同じ

## 【参考文献】

- ・田辺郷土史会編『田辺町郷土史・古代篇』田辺郷土史会 1959
- ・『男山考古録』石清水八幡宮史料叢書1 1960復刊
- ・村田太平編『京都府田辺町史』田辺町 1968
- ・高橋美久二「堀切横穴群発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会 1969
- ・万波俊介「大住車塚古墳」『南山城の前方後円墳』龍谷大学文学部考古学資料室 1972
- ・平良泰久「南山城の後期古墳と氏族」『京都考古』第14号 京都考古刊行会 1975
- ・森浩一「近畿地方の卑人」大林太良編『日本古代文化の探求 卑人』社会思想社 1975
- ・林正史「京都府堀切古墳群及び横穴群」『日本考古学年報』31 日本考古学協会 1978
- ・横山卓雄編『同志社田辺校地及びその周辺の地質—南山城の自然史—』同志社大学校地学術調査委員会 1978
- ・村上幸雄・橋本聰司「亀甲形陶棺の製作工程について」『考古学研究』第26巻第2号 考古学研究会 1979
- ・鈴木重治「山城出土の旧石器」『考古学ジャーナル』167 ニューサイエンス社 1979

- ・奥村清一郎・西川英弘ほか「田辺町遺跡分布調査概報」『田辺町埋蔵文化財調査報告書』第3集  
田辺町教育委員会 1982
- ・奥村清一郎「南山城の横穴」『京都考古』第27号 京都考古刊行会 日本考古学協会 1982
- ・奥村清一郎「八幡地区圃場整備事業関係遺跡 昭和58年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』  
京都府教育委員会 1984、竹井治雄・筒井崇史「新田遺跡第5次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』  
第94冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2000、岡崎研一「新田遺跡第6次発掘調査概要」  
『京都府遺跡調査概報』第94冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2000
- ・林正・吉村正親・西川滋「京都府田辺町堀切古墳群調査報告書」『田辺町埋蔵文化財調査報告書』第11集  
田辺町教育委員会 1989
- ・高橋美久二「堀切古墳と古墳の時代」『薪誌』薪誌刊行委員会 1991
- ・和田晴吾「近畿の剣拔式石棺」『古代文化』第46巻第6号(財)古代学協会 1994
- ・『京都府田辺町遺跡地図』田辺町教育委員会 1995
- ・南博史ほか『宮ノ口遺跡第2次発掘調査』京都府京都文化博物館 1996
- ・竹原一彦・森下衛「内里八丁遺跡Ⅰ 京都府遺跡調査報告書」第26冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究セ  
ンター 1999、森下衛・柴晚彦「内里八丁遺跡Ⅱ 京都府遺跡調査報告書」第30冊(財)京都府埋蔵  
文化財調査研究センター 2001
- ・鹿野一太郎「新遺跡発掘調査概報」『京田辺市埋蔵文化財調査報告書』第30集 京田辺市教育委員会 2000
- ・『難波宮址の研究第十一』(財)大阪市文化財協会 2000
- ・中島正・内田真雄「神童子稲葉古墳群」『京都府山崎町埋蔵文化財発掘調査報告書』第27集  
山崎町教育委員会 2001
- ・『京都府遺跡地図(第3版)』第3分冊 京都府教育委員会 2003
- ・竹原一彦「新遺跡第3次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第106冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究  
センター 2003年、高野陽子「新遺跡第5次」『京都府遺跡調査概報』第113冊(財)京都府埋蔵文化  
財調査研究センター 2005
- ・柴晚彦「新遺跡第6次」『京都府遺跡調査概報』第117冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究セン  
ター 2006
- ・鹿野一太郎・橋本清一・島軒満「堀切古墳群発掘調査報告書Ⅱ」『京田辺市埋蔵文化財調査報告書』第36集  
京田辺市教育委員会 2006
- ・増田孝彦・柴晚彦「新遺跡第7次」『京都府遺跡調査概報』第121冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究  
センター 2007
- ・岩松保他「女谷・荒坂横穴群 京都府遺跡調査報告書」第34冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター  
2004



## 報 告 書 抄 録

ふりがな	ほりきりこみんぐんほくつちようさほうこくしよ							
書名	堀切古墳群発掘調査報告書Ⅲ							
副書名	薪堀切谷・里ノ内地内宅地造成工事に伴う発掘調査報告書Ⅱ							
巻次	第37集							
シリーズ名	京田辺市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第37集							
編著者名	鷹野一太郎・橋本清一・堀内明博・鈴木啓史 三辻利一・大川健・飯田綾美・島軒満							
編集機関	安西工業株式会社 発掘調査部							
所在地	〒651-2411 兵庫県神戸市西区新地3丁目3番1							
発行年月日	2010年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
堀切古墳群 (10・11号墳、 横穴状遺構)	京都府 京田辺市 薪堀切谷 ・里ノ内	26211		34° 49′ 11″	135° 45′ 19″	2007年 8月20日 ～ 2007年 11月2日	1,080㎡	宅地造成 工事に伴 う発掘調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
堀切古墳群 (10・11号墳、 横穴状遺構)	古墳	古墳時代後 期、古代～ 中・近世	古墳群 (横穴式石 室、横穴 状遺構)	須恵器・土師器、飾 金具、二上山産凝灰 岩製組合式家形石 棺、土師質亀甲形陶 棺		横穴式石室を内部主体と する古墳時代後期後半の 円墳1基(11号墳)と、 円墳1基(10号墳)を調 査。11号墳は径約22m で、左片袖式横穴式石室 をもつ。玄室内から土師 質亀甲形陶棺片が出土。 排水溝より多数の土師 器・須恵器・飾金具等が 出土。		

平成 22 年 3 月 29 日 印刷

平成 22 年 3 月 31 日 発行

### 堀切古墳群発掘調査報告書Ⅲ

—新堀切谷・里ノ内地内宅地造成工事に伴う発掘調査報告書Ⅱ—

(京田辺市埋蔵文化財調査報告書 第 37 集)

発 行 京田辺市教育委員会

〒 610-0393 京都府京田辺市田辺 80 番地

電話 0774-62-9550

編 集 安西工業株式会社 発掘調査部

〒 651-2411 兵庫県神戸市西区新地 3 丁目 3 番 1

電話 078-967-5530

印 刷 株式会社 明新社

〒 630-8141 奈良市南京終町三丁目 464 番地

電話 0742-63-0661